

員會社銀行役員を除き、自他の農商工業者は小學校高等科迄の學力ありとせば其所用を辨ずるに不便 (Inconvenience) を甚しく感ずることはありますまい、されども學び得たらんには農民、商人、工業者と雖ども普通教育以上の力を有すれば此上なき仕合せて國家の爲めにも賀すべきことであります、諸君は學生で今や商業學校 (Commercial school) 又は實業補習學校 (Industrial mending school) 等に在らせらるゝ方々なれば私か此演説を爲すの必要ないかと思はれますれど諸君並に諸君の子弟を父兄か教育するにも益する事なきにあらざれば特に意見を叙ふる次第であります。

○學問を修めて後世に立つことを得べし

諸君よ諸君私 は學術なるものは人の世に立つ道具であらうかと存じます、斯く申

しますれば學問を修めざる人は社會の人と交際することが出来ぬかと問はるゝてありましよう、成程學問を修めぬ人とても社會の人と交際が丸て出来ぬてはありませんが學問を修めなければ智育德育の度低き爲め社會に立て雄飛 (Jump high) する事が出来ず僅か車を挽 (Drawing) や又荷物 (Cargos) を運搬し又人の爲めに使役せられて口を糊する位の事てあります、彼の車夫人足土方 (Rikishawan, coolie, labourer etc) 等の類に徴して分かります、學問を修めた人なれば社會に雄飛して或は官吏となり議員となり會社銀行の役員となり又は實業家となりて天晴れ資産を作る等を爲し得るのであります、故に社會の下層 (Lower class) にある車夫、人足、土方等の如きは縦令社會にあるものみにて實なきものと均しきを以て私が演ぶる所の世に立つ事の出来なものと云ふのであります、之に反しまして學問をなしたる人の世に立つことの出来る

云ふは前に一言したる如く世に立て雄飛し優勢(Excellence)を張ることの出来る人々を申すので彼の官吏となり議員となり會社銀行及役人となり又は資産ある實業家となるを稱するのであります。

てありますからして苟も社會の上流(Upper class)に立ちて思ふ事を行ひ言ふことを貫(Pierce through)かしめんとする有力なる者に成らんには幼き時より學問を修めまして智識道德を琢磨(Polish)して良き言動を爲し得るに至らざれば逆も世に立つことは出来ませぬ、諸君の爲めに茲に一言を費します。

○少年(Boyhood)の教育

諸君よ諸君人は少年の時に當りまして相當の學力(Literary ability)を授けなかつた

ならば其少年者は天稟の才(Natural talent)を琢かず亦學識もなきを以て後年社會に立つに當り充分なる働を爲すことが出来ないのみか國權を張り國威を輝すことを爲し能はざるべしと信ぜられます、殊に世の文明に越くと否とは同民の智識才徳の卓越なると否とに基づくことなれば國民教育として少年者の教育は一日も忽諸(Neglect)に附することが出来ないであります、然るに兒童の學齡(Learning age)に達したるにも拘はらず法律の強制(Compulsion)を受くる迄は尙ほ家事に使用し學校に通學せしめず愈々通學せしむるも家に歸れば書を抛つて家を補けしめ更に復習(Reread)の時間を與へざる者なりと聞く慨嘆(Grieve)すべきの事ではありませんか縱令何程家事が多忙なればとて貧困(Poverty)なればとて十歳に満たざる兒童の家事を補けしめたりとて何程の用を爲し得ましやう、恐くは其事に従事するのみて時としては却て邪魔(Hindrance)

Demise) となるなきにしもあらざるべしと思はるゝのであります。此の如き事情なるに強いて其家事に使役し少年の授學に必要なるときを空費 (Expense) せしむるに當に其兒童の爲めに憫むべきことあるのみならず國家の爲めに悲しむべきに至りてあります之れ政府が強制的に兒童をして就學せしむるの必要なる所以であります。

又た少年の時に教育を施さざれば決して成長の後之を施し得るものではありません假令施し得るとしましても恐くは學事に時を費すの時期でないのです、されば少年の時に教育を施すに如くはないと存じます、斯くて少年國民一般に教育を施すときは將來の日本國は皆文字の知識あるを以て國の獨立を守るにも忠君愛國を捧ぐるにも大に與つて力あるべきことなれどもさなくば支那國民の如く國の獨立を守ることを知らず忠君愛國の赤誠 (Sincere heart) なきに至るものであります、回顧すれば支那の開化せ

ざるは日清戦争及拳匪の亂に於ても知らるゝを得たるのであります。开は即ち支那の兵卒又は支那の士民にして文字の知識ある者は實に稀 (Rare) なるに徴して成程國の進まざるは國民に教育の無きので分かると我國一笑 (Laughed at) したる次第でありました、右述べたる通りでありますからして少年者に授くべき相當の學力は必らず之を授けなければなりませんと存じます。

○學問の必要

諸君人類は洋の東西時の古今を論せず學問を修めて才徳を琢かないならば縱令人類であると云ふ貴き位はあるも光輝 (Brilliance) が放たない故自他の萬物たる禽獸草木の類と異なる所はありません、されば人は少き時に學問を修めて才徳を琢くことが肝要

てあります、昔より貴位(Precious rank)に上る人も皆學問を修めて才徳を琢いたか
らてあります、尤も餘り學問を修めない人でも高貴の位の上らぬとは限りませぬが是
れは天才(Genius)と天徳(Grace)とが高く並々の人より勝れ居る所があるからです、彼
の豊臣大閥の如きは取も直さず此例に當るのであります、其凡庸婦(Medioere
men & women)の輩に至つては學問を修めて天稟の才徳を琢かなければ逆も立派の人
となることは六ヶ敷いのであります、彼の猿(Monkey)も藝(Art)を作すには藝を仕込
まざれば猿藝を作す能はざると少しも異りませぬ、尙ほ學問の人類に必要な事は種
種なる理屈もあれど又譬(Example)へもありますれども最早時間も迫りましたから今
日の演説は之れにて擱(Stop)をします。

○所 感

諸君 私 は當市の繁榮に付きまして聊か所感を述べたいと思ひます、扱て當市は諸
君の御承知の如く新開地で明治何年頃より追々市街(Street)を成し人家稠密(Houses
crowded)になりました、是れは生糸織物(Silk & stuff)等の産物(Products)が澤山に
當市より出ますからして各地の人が自然と當市に移住(Migrate)したが爲めてありま
す、されども一昨年頃迄はまだ外人が當市に参りまして當市の商人と直取引(Direct
transaction)を爲すなどの事は無かつたのですが昨年頃より米國人英國人佛國人等の
外商續々入込みまして盛に貿易(Trade)を爲します爲め頓に當市は商業の一大改革
(A Great improvement) 否な一大繁榮を見るに至りました、是れ實に當市の商業家諸

君が熱心に商業の發達を希望せらるゝの結果てムります、何れの地の商人と雖ども商業の發達を望まぬものはありませんが直接に自己をのみ益せんが爲めに疎悪なる貨物 (Bad goods) をも完美なる貨物 (Perfect goods) の如く欺きて賣り又は價額の高貴ならざるものを非常に高く賣る等の事を爲して顧みない所から外商の信用 (Credit) を繋ぐことが出來ず其爲め其他の商業が著しく發達しないのであります、之に反して當市の商人は流石に明治の商人てムいますからして自己をのみ直接に益せんことをのみ務めず一般商務の發達を求めん爲めに組合 (Guild) を設けて鹿悪なる貨物を扱はぬこととし價額の大體を定めて非常なる暴利を博せぬ事と致しましたからして信用は當市商人の一般に及び従つて一己人の信用をも増すに至りました所て知らず識らずの間に僅か一年間にて此通り商業は長足の進歩を爲し繁榮を見るに至つたのでムります、仍

て私は此當市の商業の繁榮を祝すると共に特に當市の商人に一言したきは益々奮勵して外人に拘はらず内地人にも信用を増す事をのみ務めて斯業に孜々營々たらば恐くは數年の後は三府五港に愧ぢない繁華を見らるゝと信じます、滿場の諸君は當市の商業家のみてムりますからして聊か所感を演べまして祝詞に代へます。

○歸朝 (Return to Japan) を祝して

諸君自己の見識を作り國家の爲めに益せんと思ふ者は幾人となく世間にあることと存じますが外國に旅行することは容易の事でありません所からして思ふのみにて實際洋行 (A tour abroad) して視察を遂げ歸朝する者は實に尠いのであります、然るに當町の何誰君は曩さに大阪に出て司法省 (The department of justice) 指定の關西法律學

校に入り法科學を研究被成れてありましたが、翻然思ふ所ありて商業に心を傾け洋行を
思ひ立たれまして私費 (Private expense) を以て歐米各國の商業を視察し精密なる調査
(Exact investigation) を得て一昨日歸朝せられました、其外國にあること七年殆んど
風に櫛り雨に沐して視察を遂げられたる熱心は誠に感服 (appreciate) の至りに堪へま
せぬ、今日は同君の歸朝を祝する爲め同志相集りまして同君を招待致しました次第で
私は謹んで同君の海上 (Voyage) 無事御歸朝なされましたを祝すると共に其御視察
を遂げられました得たる御見識を我内地に於て實行せらるゝ曉に我國の利益となるこ
とを確信し我帝國の爲めにも祝するのであります。

○婚禮 (Marriage ceremony) を祝して

諸君本日は法學士何誰君と何市何町何某の何女某と結婚なされました御婚禮で誠に
良伉儷 (Good couple) であります、凡そ夫婦なるものは一身同體 (One & same body)
の原則 (Principle) に従ひまして苦樂を共にしなければならぬのみか其關係は生涯
(Whole life) に亘ることでありますれば互に氣質の相合し智識才徳の度も相對せなけ
ればなりません、若し此等が不釣合 (Incongruous) でありますると一家の和合は到底望
めない譯で氣の毒ながらも離婚 (Divorce) しなければならぬこととなるのですが幸ひ
御兩君には同一の御氣性と謂ひ同一の智識才徳と謂ひ何としても不釣合の點なきのみ
で天晴れ世間の男女に秀拔なる所ありますれば缺點 (Defect) とては一もなく誠に良伉
儷と存じます、仍て兩君の萬歳を祝します。

○卒業(Graduation)を祝して

諸君よ諸君學生の卒業は事業家の成功と同一でムリまして最も名譽でありますが此度吾親友何誰君は久しく東都に在學せられましたが此度東京帝國大學(Tokyo Imperial university)の法科を卒業被成ましたは誠に祝賀の至りに堪へませぬ、大學の卒業は學科の高尙なる文學理の蘊奥を極めらるゝのでありますからして學力優等て已に學士の稱號をも得られました、今後同君は辯護士(Attorney)又は判事(A Judge)と成られまして社會に雄飛せらるゝこと、信じます。

扱て御卒業に就て私は朋友の信義(Faithfulness)を以て一言御注意を申上置き度きは兎角學生の學を了へて社會に立つや學生風を脱せず天真爛漫(Nakedness)の舉動に

出づるかと思へば自己の識を量らず反對に輕視するの風があります、是れ必竟學生は世の風潮(Fashion)に染まざる爲めでありましやうが只徒に風姿を高尙に構へ時としては婦女子や老人輩を威嚇(Intimidation)すると云ふが如きは残念なる次第でありまして斯くては到底社會に屹立する勢力を有することは出来ぬのであります、就ては同君にも此意を體せられまして社會の大學院(University Hall)に入られませんことを偏へに希望の至りに堪へませぬ。

○銀行員が昇給(Promotion of a member of the bank)

を祝して

諸君實業に従事しまする者も猶ほ官吏の如く昇給の名譽は同一でムリます、されど

も容易に昇給の得らるべきものではありません、然るに何誰君は何銀行に幾久しく出勤なされ居りますが此度御昇給になりました目出度存じます、是れ平生御勤勉になると同時に總て行務(Banking)を取扱はれるに方正慎直(Right & prudence)を以てせらるゝからであります、私も實業には豫て心掛けて居りますもの、由來官廳(Government office)に奉職したる者でありますからして俄かに銀行に出勤するの便もなく縱令銀行に出勤すればとて何誰君の如き高給を受くる身とはなれませぬ、誠に何誰君は非常なる幸福と名譽とを保有せらるゝのであります、仍て御昇給を祝します。

○忘年会(Leave year meeting)に臨みて

諸君昨年の今日諸君と此亭に會し忘年の宴を張りましたが最早其れより一年を経ま

して茲に亦た忘年の宴を張ることになりました、諸君よ諸君は何生命保險會社(Life Insurance Co.)の役員で孜々營々として三百六十日の間業務に従事致しました、其間には色々の混雜事件(Several confused affairs)も起り社員の間には相嫉視(Jealous)するの傾も生じた事がありました、又甲員と乙員との間には誣罔の言(Libel words)を以て中傷を加へたりとの事より一場の葛藤(Complication)を惹起しまして某取締役(Director)に迷惑(Trouble)を掛けし事もありましたが幸ひに社外人に對しては何事も起らず至て無事平穩(Safe & peaceful)の年でありました、右社員間の色々の紛擾も年末の片付と共に一段落(One section)を告げて片付きました故今日は宛かも一年中の大掃除(Great cleaning)を爲したと同一の心地せられました諸君と茲に忘年の宴を開かれたのでありますれば今年中の事は御互に一切遺忘(Forget)に付しまして更らに明年

(Next year)の目出度春 (Ouspicious spring) を迎へなければなりません、依て私は此處に忘年の爲め將た一層の懇親 (Familiar) を同くする爲め一言清聴を煩はしました。

○分娩 (Parturition) を祝して

諸君 私は甲君の友人でありますが甲君は當地で名望家 (Popular man) で且つ素封家 (Wealthy person) でありますが惜哉 (Pitifully) 御夫婦の間にまた御嗣子 (Heir) とてなく日頃何君は非常に之を残念に思召され是非子 (Son) を擧げたきものだ杯と寢食の間にも御話せられて居りましたが天帝の至仁 (God's mercy) なる此度目出度も御令聞 (Mrs.) は御出産になりました、就きましては同君の喜悅は申すに及ばず私迄も大なる喜で定めし諸君も御同感と存じます、殊に其出産は男子 (A male) の御方であります。

すれば御家督の相續 (Succession of inheritance) で格別目出度事でありませぬ、若も此出産がない時には乍遺憾も御養子 (Adopted son) をしなければならぬので御養子が甲君の御性質に適ひ御家風 (Family custom) に染めば良きもの、中々適當なる御養子を見付け出す事は困難なのであります、幸に御實子 (His own child) の御出産ですからして此心配もなく實に結構の事でありませぬ、私は御母體なる御令聞の御壯健ならんことを祈り併せて御子息の健全に御成長 (Healthy growing) あらんことを祈 (Pray) るので敢て祝意を表します。

○親睦會 (Social meeting) に臨みて

諸君よ諸君は我親愛なる同窓の友人 (Our intimate schoolmates) にて實に艱難苦樂

を共にする登雪の益友 (Hard studying good friends) にはありませんか、其親愛の至情は天に出るとは云ふものゝ時々相會しめて學術上の智識を交換 (Exchange) し將來を計るの事なくんば何を以てか其親愛の至情を共にすることが出来ましやう、今日は此親友のみが一堂に會しめて舊を語り新を話すの時てムりますからして何卒諸君は互に胸襟を用ひて親睦の實を擧げられんことを切に望むのであります。

○新年宴會 (The new year's entertainment) に臨みて

諸君本日は大正八年の新春 (New Gladness) を迎へましたに就て之を祝するところの宴會でムります、世の素士 (Curious man) は云はん、吾れ〜人類は早晚 (Sooner or later) 死せざるを得ず、殊に人生は五十年を以て限りとす、然るに年の初めに於て

之を祝するは人類の死に近づくを祝すると一般にして矛盾 (Contradictory) の甚しきものなりと、成程一寸考へますれば年の初めに之を祝するより弔 (Condole) すること當然の如くに思はれますが決して新年を祝するのは左様な譯でないと思ひます。

人類は生存の目的と致します所は此世に一大事業 (A Great Work) を爲し生活上立派なる繁榮を得んことを期するのであります此希望を抱けばこそ將來の一年間の目出度此一大事業を爲さんとて新年の初めに其年を祝するの所謂年の延壽 (Omen) を祝するのてムります。

されば新年を祝するは決して不都合 (Unreasonable) でなく笑しく (Laughable) なるので諸君はこれが爲めに祝宴を設けて祝意を表するので私も亦之に加はる譯てムります、てムいますれば諸君よ諸君御互に今年は奮發一番大に事業を成そうてはあります

せんか、私は其の計畫の一端として茲に腹案(My plan)があります故諸君に御披露(Advertisement)に及びます。

其腹案とは云々てムります。(茲に自己の腹案を述べ、賛成々々の聲沸くが如し) 斯く諸君の此案に御賛成被下る上は私は諸君と共に本年も事を俱にして大に爲すの所存でムいます、先づ新年を祝しまして聊か諸君の清聴を汚がしました。

○名譽の戦死(Honourable death in battle)を

追悼(Memorige)して

諸君我國は某國との間に戦端を開きまして目下陸に海に我軍人は兵を某國に向つて派し戦闘交々酣(In the height of battle)であります、然るに何々の戦は接戦幾時間

に涉り頗る猛烈(Vehement)の戦でありましたが遂に我軍の大勝利に歸しました、此戦に於て第何師團第何聯隊の何中隊にありました軍曹何某君には不圖も(Unexpectably)戦死せられました。

同君の戦死せしときの状況を在軍の某友人より報道(Report)して参りましたが同君は同中隊の兵士を指揮して(Command)何方面の攻撃(Attack)に當りましたが敵軍は退却(Retreat)の色を表はさざるを以て突貫(Bayonet charge)の爲めに一軍を奮勵して敵壘(Enemy's fortress)に上りましたが此時の先登(Leader)は同君でムりました同君の其敵壘に上り一聲高く我大元帥陛下萬歳日本帝國萬歳を稱するや士氣(Martial spirit)を鼓舞した事は夥しいので此時早やし彼時遅し敵の砲丸は同君の胸邊(Breast)に飛中して爆裂(Explode)しましたが同君の頭首四肢は悉く粉碎(Crumble)せられ

pluck pluck

したなれども爲めに我軍には一人の死傷なかりし爲め一軍は同君の聲に勵まされて突貫しました爲め敵軍を退却散亂(Scatter)せしめ其壘を占領したるのでありますと私は此報道に接しまして同君の勇武(Bravery)なる實に比倫無(Matchless)と思ひ只管追悼敬慕(Longgrief)の念が起りました、軍人の戦に在て戦死するは名譽でムりまして同君の勇猛なる戦死は格別で國民全體爲めに其死を悲み其武勇を後世に稱せらるゝのであります、私は謹んで同君の名譽の戦死を追悼致します。

○落第 (Pluck) は憂ふるに足らず

何君には此度中學校教員檢定試験を御受けに相成りましたけれども不幸にして御及第の榮を得るに至りませぬ、嗚かし御本人始め御一同殘念に思召さるゝてありましや

pluck
pluck
pluck

うが、元來試験なるものは非常に運不運 (Fortune or misfortune) がありまして必らずしも力のあるものが及第する力の無きものが落第すると限りませぬ力の無きものにても運強くば及第し力ある者にては運拙なくば落第するのでありますからして今年御不幸にも御及第になられぬとて明年は御及第に被成ますことなれば決して御落膽 (Doubtful action) なされぬが宜しいと思ひます、殊に何君には學力豊富 (Affluent) で被爲入ますることなれば此度運拙なくして落第なされましても明年は必らず御及第に相違ありません、聞く所に依れば彼の有名なる教育家何某君にも曾て外國の大學校に在る時二回も試験に落第せし事あるも學力は優等 (Superior) なるを以て卒業の時が一番に被成せしたそうてムります、されば明年の試験には何君には及第者の首席 (The head) に居られまするの幸福に接せぬとも限りませぬことなれば決して落第を憂ふるには及び

ませぬ。

○先生の靈を祀りて (Deifying a teacher's soul)

諸君よ諸君は何先生は資性温厚篤實 (Gentle & cordial) でありまして能く子弟門人 (Pupils) に教を垂れられましたのみでなく世人に對しても著書等 (Works) に依りまして文明を誘導せられました先生の長所 (Special excellence) は外國の歴史に通じ殊に英雄談 (Stories of heroes) に得意でありましたが悲むべし先生行年九十八歳を以て溘焉 (溘焉) として席を黄泉下 (Hades) に移されました、本日は即ち先生の三周年祭 (Third years anniversary) にて吾れく同窓生は一堂に集りまして先生の靈を祭り弔意を表するのてんいます、先君の會て吾れく一同に告げられました其言は吾れくの服膺 (Bear

in mind) しまして決して忘れてませぬ所てんいます、何卒先生の靈來りて吾れく門人の微意 (Humble mind) を享けさせられん事を祈ります。

○戦後の經營に就ての演説 (A Speech on the projection about after war.)

侯爵 (Marquis) 大隈重信

世人口を開けば戦後の經營と云ふ然れども所謂戦後の經營なるもの果して見るを得んか閣臣 (Cabinet Ministers) の施設せんとする代議士 (Representative) の論争する所焉を稱して戦後の經營となすに足らんや、今や千載一遇の時に際し大に國威 (National prestige) を宣揚し國權を擴張し國益を増進し以て宇内 (The whole world) に雄飛

せざるべからざるに戦後の經營なるものにして此の如くなる以上は何を以てか國家の進運を望むを得んや或は云ふ財源 (Resources) に制限あり戦後經營の規模狭小に失する所以は實に已むを得ざるに出づと嗚呼滔々たる天下一人の戦後經營の大業を抱くものなきか、言ふ勿れ財源に乏しと日本は決して斯る貧國 (Poor country) にあらざるなり、此日本の富を以てして猶且財源を得る能はざるなれば是れ日本の貧なるが爲めにあらずして政治家 (Statesman) の愚なるが爲なり、嗚呼戦後の經營何ぞ論ずるに足らんや、財源を得る如きに至ては眞に容易なるのみ誰か言ふ財源に乏しと余をして其局に當らしめば唯一の酒造税 (Wine tax) を以てするも猶且つ戦後の經營を爲して餘裕あるを信ず。

既に酒造税を以て財源の一となす何んぞ、自家用料酒を禁ぜざる 逆も一部の歡心

(Good will) を失はん事を是れ恐れ僅かに税率 (Tax rate) のみを引上げて以て足れりとする何ぞ規模の小なるや自家用料酒を禁止せば全國の酒造高正に六百萬石に上るべし、故に一石七圓とするも尙ほ四千二百萬圓の收入 (Income) を得る事易々たるのみ又何を苦しんでか婚姻死亡出産 (Wedding, Death, Birth) 等に課税するを要する事をせんや自家用料酒なるものは獨り國庫 (National treasury) の收入を害するのみならず又國家を害するものなり。

第一富 (Wealth) を害し第二衛生 (Sanitation) を害し第三風俗 (Custom) を害する事甚し即ち之を禁ずる國民を健剛 (Strong) にして國力を増進する所以なり、政治家たるもの豈に這般の消息を看取するの眼光 (Vision) なくして可ならんか、臥薪嘗膽を唱ふる寔に善し未だ知らずズボラ三昧悠悠々手製の濁酒を飲む者果して臥薪嘗膽乎、此

の如きは支那人の道德論 (Moral discussion) と一般のみ當局者たるもの何を迷うて自家用料酒を禁止せざる衆議院議員何を憚りて此議を唱へざる、此の千載一遇敗政大革新の時期に遭遇しながら敢て逡巡躊躇 (Hesitation) 斷然財源の伏する所を發く能はず以て此の好機 (Fair chance) に背かんとす、此くの如くにして焉を戦後の大經營を成就 (Succeed) するを得んや。

彼の登記料を登録税 (Registry tax) と改名して果して何程の事がある、財産の移動に課税するは不可なきを以て相續を起せしは可なりとするも戸籍税 (Census registry tax) を課するに至つては抑も何の意ぞ。

營業税 (Business tax) に至つては一驚を喫するの外なし其複雑繁多にして税率の不當なる殆んど徵税の精神を知らざるものなり、宜しく之を修正し重なる營業のみに課

税して他の些々たるものに至つては速かに廢除 (Put out) すべし、税法は須らく簡にして納税者 (A tax-payer) を苦めざるを要す、多數の人民に苦痛 (Pain) を與へても其收入少きは豈に税法の宜しきを得たるものならんや。

竊て政府の軍備擴張 (Military extension) 如何を見るは海軍第一期の計畫は七八年を期して二十萬噸に達せしむるにありと云へり、是れ果して真か若し然りとせば東洋の大勢 (Circumstance) は果して七八年の猶豫ありと爲すか余は之を短縮して四五年間に二十萬噸に達せしめん事を欲す況や造船術 (Ship-building) の進歩したる今日に於てをや、海軍擴張の規模小なるに反し陸軍擴張の規模大に過ぎざるか〇十〇萬の大軍は何れに向つて動さんとするか日本は島國 (Insular country) なり須らく海軍に重きを置かざる可からず故に陸軍は新に十二萬を増し現在の二十四萬と合して三十六萬に達

せしむれば足れり當局者の軍備擴張 豈又完全なりと謂ふべけんや。

○時局に就ての演説

前司法大臣 尾崎 行雄

世間では私共の主張する民黨聯合 (Alliance of the popular party) を不可能事であるかの様に云うて居るものがある、否至難を唱ふるものが少なくないのである。然し或者は一步を進めて民黨聯合の大願成就するのは政友俱樂部は勿論 (Of course) の事國民黨も中正會と硬派分にも今日に於て合同するにあらざれば漸じて不可、これが先決問題 (Forego subject) であると聲を大にして論議するのである、思うに之は多くの人々も同感 (Concurrence) の事であるに相違ない、私も一應道理ある主張と耳を

傾けるに吝てない。

併し民黨聯合の前提 (Premise) として私共と國民黨なども合同するには至難ではない全然出来ない相談ではない、現に左提右携して地方遊説 (Local oration) などにも出かけて居る位であるからこれを合同と見るも亦決して不可なき實際である實情を示して居るのである、それ故に私の唱へる所であると申すのは此の民黨聯合の大願望 (Great desire) たるや決して少數の在野黨合同に非ずして更により大なる希望がなければならぬ、それ以上のあるものがなければならぬ今日に於て政友俱樂部と國民黨と中正會との合同を策するが如きは一小些事 (A small matter) に過ぎない、眞に民黨聯合の實をあげ様と熱望するものは大切なる或物の考慮を如何にするも除外する事は出来ない筈である。

然らばそれは何であるか問ふまでもない政友會の破壊(Destroy)である。横暴(Violence)を極めつゝ議會に多數黨たる政友會の抱擁する議員の過半数以上に減少するの策を講ずる事である、これが私共の第一に着手すべき事業である、この目的を達するにあらざればいかに民黨聯合を説くと雖ども其れは一片の空談(Useless talk)に過ぎないのである。

然らざれば私共の理想(Idea)は達せられないのである、否なそれではなければ今日の在野黨が合同するも何等の効果(Effect)なく何等の權威もなくこの奔走も唯だ徒勞に過ぎないのである。

こゝに於てか私は民黨聯合の大願を成就すべき第一着手は政友會の破壊であると主張するものである、私共の目的(Object)を達するの捷徑(Short cut)としては今回議會

に絶對的多數(Absolute majority)を占むる政友會を破るにありと云ふも妨げない、然らざれば到底民黨聯合軍は議會に於けるキャスティングボートを制する事は出来ないのである、併し私が斯く申すならば世間の多數の人々は少なくともそれは出来ない相談(Consultation)である、到底そんな事は行なはれないだらうと云ふに相違ない、空論とけなすかも知れない、いやそう云ふて居るのである、世間の人々は私の主張に左袒する事厚からず、政友會打破の聲に深甚の意義(Meaning)あることを考へず更らに危然たる處の政友會に動搖(Motion)あるべしなど、信じないのであらうが私の見る所に依ればかの政友會をして絶對多數を占むるの誇りを失はしむることは左程に困難ではないのである。

何故かと申しますればかの政友會中には私共と主義に於て、政見(Political view)に

於て同じくする者が少なくないその人達は「最近の政變」に際して私共と行動 (Opportunity) を同一にする筈であつたのである、けれどもいろいろの關係からして夫れが出来なかつたのである、それ故に愈々機運が熟したならば民黨聯合が或る形式 (Form) によつて實現せらるゝ際には必ずかの人達は私共と同一行動に出て私共と等しい大命下に參集することを疑はないのである、それと同時にかの政友會中には官僚黨に旗を馳すべきものも少なくない事を忘れてはならぬ、かくて政友會は今日の榮華 (Glory) を過去の夢 (Dream) と観するの外はない事になるのである。

其の機運は何れの日に来たるであらうかその現實は何れの時であらう今や正に秋冷の候となつて世は政治季節 (Political season) に入つたその時この機會も近き將來に到來すべきは私の信じて疑はない所である。

世に「噴火口上に座する思ひ」 (An Idea seating on the top of a volcano) と云ふ言葉があります。丁度此の言葉は政友會の現状を説明したものである様に思はれる、かの政友會を評するに最も適切なる辭である様に考へられるのである、なにも知らぬ世人の多くは政友會と山本伯との調和圓滿 (Smooth) であり、すべてのこと順風に棹さすが如きものありと思ふてをるかも知れない。

けれども實際はなか／＼左様ではない政友會出身の一二閣僚と山本伯とは結んで解けざる感情 (Feeling) が横はつてをる事は蔽ふべからざる事實であると同時に冷靜なる觀察に見れば來るべき政界の前途には幾多の暗礁 (Reef) が隠見しつゝある政海には時ならぬ暗流が動いてをると云ふ事は識者の夙に認むる所である、例へば外交問題 (Diplomatic problem) の如きに對しても政府には一定の方針ありやさへ疑はしい位で

現内閣の取りつゝある所は遺憾ながら輿論 (General opinion) とは合體となすのである。世間の期待に副はざる内閣の存立すべからざるは第三次桂内閣が前例 (Former example) を示して居るのである、更に外交問題に於て對米問題も對支問題も有耶無耶の間に葬り去つたとしてもこの外に剩餘金問題を云ふものがある、利害 (Gain or loss) の念に弱からざる而して打算に強者たる政友會出身の大臣が如何なる方針を以て之を處分するかこれ實に注意すべく又最も興味 (Interest) ある問題でもある、私はこの問題の爲めに少なからぬ波瀾 (Disturbance) の生ずべきを信ずるものである、故に識者に特に注意を促がしておきたいと思ふのである。

この外交問題と云ひ剩餘金問題と云ひ決して輕々 (Easily) に觀過する事の出来ない問題ではあるが、この外に現内閣の試金石 (Touchstone) とも云ふべき更に政友會死活

の分岐點とも認むべき重大問題の存在せる事を何人と雖ども忘れてはならぬのである。さう云ふ様な重大問題とは何人であるか曰く最近の政策に原動力 (Mortar) たりし増師問題である、此の増師問題が依然として未決の問題である間は何人が局に當るも波瀾は免かれない。

矢張り増師問題は政海の暗礁である、山本伯にも成算 (Prospect) はあるであらうが此の問題を如何に解決するであらうかは最も注意を要するのである、山本伯の苦衷 (Trouble) も察すべからずである。

けれどもそれ以上に考へて居るのは政友會である、此の問題が未解決にある裡は政友會は枕 (Pillow) を高くする事はできないのである、其の誇とする議會に絶對多數を占むる事の出來ると出來ないとは此の問題に依て居ると申してもよいのである。

今や政海は刻々と變化しつゝある政海の暗流の動搖の常ならぬを見てか遂に政友會は灰色の態度 (Attitude) を改めて増師問題に對しては何處迄も反對であると云ふ旨を聲明するに至つたのである、かの増師の打切と云ふたのは餘程の決心 (Determination) をしたのに相違ない、この言明は聽て政友會の布いた背水の陣とも見る事が出来るのである。

唯だ政權に戀々としてその他何等の理想もなく主義もなく更らに政見もない政友會が増師問題にのみ對して鮮明 (Clear) なる態度を示したのは如何に政友會が苦境にあるかを説明するものである。

萬々一政友會をして山本伯の嚴命 (Strict Order) に屈し増師問題を認むる様な事があるならばその様な事があるならば輿論は一齊 (Together) に反對するに相違ない否な

増師問題の爲めに西園寺内閣は倒れたのである、政友會は増師問題の爲めに起つたのである、そうして久しい間天下に信用も失して居た政友會も亦辛じて (Hardly) 信を繼ぐ事が出来た。

換言すれば増師問題は政友會に取つては復活 (Resurrection) の守護神 (Guard God) であつた。

それ故に此の守護神に叛逆 (Rebellion) を企てる事は政友會の滅亡 (Ruin) を意味するのである、今日に於て政友會が世に不信を買ひつゝあるは彼等の不明を以てしても分る筈である、こゝに於て増師問題の打切をしたけれども此事のみを以て政友會の健全を豫言 (Prophecy) する事は出来ないものである。

この様に政海の暗礁は隠見しつゝある、何時まで平和な航海を續け得るかは疑問で

ある、その波瀾の重疊する時こゝに私共の理想とする民黨聯合に行はるべき秋近づいたのである、私共の大失望 (Great Dispair) は遺憾なく達せられるのである、併し政友會の萬歲 (Long live) は唱へられても私共は決して失望するてはない、何故と申せば政友會の全盛はもう長くないからである、來るべき政變に通過し得る共彼等が天下 (On earth) に受けつゝある不信は如何共することが出来ない、彼等は自らこいた草を自ら刈るべき秋に際會したのである、彼等が唱道する所を以て天下の人心を作り欺む (Deceive) ことは出来ない時となつたのである、私共は初め政友會の自然滅亡を待つ事をなさず積極的打破 (Active destruction) を企てたのである、そして政友會から五十名の議員を引抜く考へてあつた。

然るに中途にして其不可を見るに至つたので今日では積極的政友會を破壊の手段

を改め更により有效なる永久的手段 (Eternal means) を收る事にしたのである。

其永久的手段とは何であるかと申せば、今日に於て議員を收ると云ふことは有力 (Powerful) でなくそれよりも選挙區を收むる事が先決問題であるから議員よりも選挙區を收むると云ふのである。

この選挙區 (Election district) を收むると云ふ事を私も考へてゐた、其れ故に私は最早選挙區を收り其次に議員を收る策を建てたのである、然るに實際に於て議員を收るも選挙區は收れないものである事を發見した殊に政友會の如き左様である。

政友會所屬の議員は其れだけ權威がないのである、私共が地方遊説に當つて「どうだ君等選挙した何某を政友會から脱盟 (Withdraw) しては」と問ふ時その人々は異々同音 (Unanimously) に「それは御免だ」と云ふそうだ何故かと反問すれば「いや別

に理由もないが若し今日彼を吾々から脱盟さす様になれば次の選挙に助力 (Support) せなければならぬから」と云ふのであつた、地方の人の語る所は何を意味するであらうか、選挙區民が其の選出議員を如何に軽く見て居るかは推測 (Suppose) することが出来るであらう、こゝに詳言すれば選挙區の代表者が議員を完服 (Obey) することが容易である。

されども其様な議員を再選 (Reelect) するのは天下の不明を表白するのと同じである、こゝに於て選挙區の有力者は来るべき総選挙 (General election) までは遺憾ながら議員をして其の選挙區を代表せしめて置く併し次回の選挙には彼等を拒否 (Refuse) し彼等に優るの人物を選出するのである、私共は此の實際を知るに及んで主義政見に忠實ならぬ今日の議員を收ると云ふ事を断念 (Give up) したのである。

そうして来るべき総選挙に於て確實なる勝利を占むべし、私共の理想を行ふべく全力を選挙區の占領 (Occupy) に注ぐことにしたのである。

即ち私共は来るべき政變に際して少くとも政友會をして絶對的多数のブイラドを失なはしむべき確信はあると同時に次いで根本的 (Fundamentally) に政友會破壊をなすのである。

それが私共の選挙區に全力 (Effort) を注ぐ所以である、左様！私共の爲めに時勢が有利であると云ふ事が出来ませう、政友會の總花政策乃至は黨略に欺むかれぬ地方人士は必ず私共の理想を行ふに多大の助力を吝まないてあらう、私は現狀を以て悲觀するものでない。

私共の着手 (Get about) してもう手段は第一に近き政變に於て行はるべく次いで

總選舉に於て實現さるべく既に少なからぬ選舉區は私共に應じて彼等に背きつゝある
のであるから私共の活動(Activity)には今日以後があるのである。

○内外商況の概要及び正金銀行の前途に就て

正金銀行頭取 園 田 幸 吉

株主(Shareholders) 諸君茲に第三十二回定式總會を開き昨年下半年期間の決算(Out-
line)を報告するに當り諸君の御參考(Reference)の爲め内外商況の概要(Outline)並
に本行の前途に關して聊か叙述する所あらんとす。

戰捷後(After Victory)に於ける本邦の商況は一時振興の兆ありしも諸君の知らるゝ
如く遠東返還の一條は自然に人氣を沮喪したるが上に新領土の鎮定未だ完からず戰後

の經營未だ定まらざる等の爲めに世上兎角警戒(Warning)の念慮を絶つ能はずして進
退を躊躇するの狀ありしが元來戰時に在つて退守に憂ふ人心は平和の克復に達して早
くも進動の氣勢を萌し唯惶惑(Puzzle)の狀に制せられて其進動を遅延しつゝありしに
外ならざれば當季に入つて日本銀行が率先市場緩和の方針を執るに及び商業社會は
爰に其の適從する所を知りたるものゝ如く疑懼の顧念漸く消滅して局面の一變を來し
諸物品諸株式の賣買益々繁忙を加ふると共に其相場(Market Price)も少なからず騰
貴して市況甚だ活潑に赴き殊に銀行會社の新設増資は頻々として踵を相接し或は戰後
往々免れざる所の暴進を氣遣はしむる程なりしかば一方に於て資金の需要(Demand)
を増加したるに相違なしと雖ども又一方に於ては多數の出荷ありたる生絲(Silk)は其
賣買頗る盛況を呈して資金の運轉溢滞なかりし等市場を緩和するの事情ありしが故に

金融 (Circulation of money) は常に圓滑の有様にて経過せり、而して歐米諸國の景況は曾て一言したるが如く諸物價概して幾分の騰貴を示し商況復興の兆稍や觀るべきものあれども從來金融の緩漫 (Slack) 久しく引續きたるを以て自ら投機取引を誘獎し巴里を首として歐洲大陸諸市場に前季以來亞米利加金坊諸會社株券に關して投機 (Speculation) 盛に行はれたりしが當季十月十一日の交には其の反動として俄然該株券の崩落 (Falling) を起し之と殆ど同時に東歐の風雲漸く急を告げしかば相前後して大に銀行者を警戒せしめ、亞て季末に至つては南亞米利加事件につき英米の交渉 (Negotiation) なり又南亞米利加事件につき英獨の紛争ありしが故に歐洲の金融の爲に再び多少の影響を蒙るを免かれざりき、就中 (Above all) 南米ウエネヅエラの境界問題に關しては英米政府互に固執する所ありて米國の如きは爲めに一時非常の恐慌 (Panic) しては

を感じ金利格外に暴落し遠く其餘波を本邦生絲市場に及ぼしたり、然れども斯く時々警變ありしに拘はらず歐米の商況は大體復興に向ふ姿あるが如く而して本邦外國貿易 (Foreign Trade) に至ては輸入とも屢々として増加し且つ爲替相場も平穩なりしが故に本行の前途別に變故 (Alteration) に遭遇する事なく其成績に於ても敢て例年に譲らざるを得たり。

是れより本行の前途に關して一言せんに本行は從來孜孜として對外事業の擴張に銳意し近時大に發達の實を呈したれども今や國運振張の時に會し將來益々其擴張を請ぜざるべからざるは諸君の夙に知悉せられる所、今また之を反覆 (Repeat) するを要せざるなり、然るに本行は近時非常に資金の缺乏 (Scarcity) を感し成るべく之れを内地事業に省きて對外事業に加ふるも尙ほ且つ其の不足に苦しむを以て取締役

(Director) は諸君に通知したるが如く先般既に新株未拂込金の拂込を評決したれども前述擴張の目的を貫徹 (Accomplish) せんには到底之れを以て足れりとなすべからざるが故に今般は更に資本金増加案の提出を必要とするに至れり、本件に關する委細の説明は後刻の臨時總會に譲つて茲に贅せざれども對外理財機關 (Economic Organ) たる本行の任務上に於て是れ誠に止むを得ざる所にして即ち國運の振張に應ずる至當の準備たるに外ならず此儀幸に諸君の可決する所とならば新株の拂込と相俟つて本行の資力を充實にして信用を鞏固にし庶幾くは益々擴張の素志 (Aim) を舒ぶるを得ん然れども退いて之れを考ふれば吾々當局者の責任は爲めに彌々重大を加ふること勿論にして今より深く茲に相戒め鞠躬盡瘁 (Hard endeavour) 以て事に當り努めて諸君の信用に辜負せざらんことを期するなり、且つ諸君に報告すべきは今般本行は在龍動政府

の寄託金の保管出納取扱所代理を日本銀行より委任 (Entrust) せられたること是れなり、抑も清國償金 (Chinese indemnity) の處分如何は最も重大なる問題にして世の凝視する所なるに、今其取扱ひに従ふの榮を荷へるは寔に本行の面目と稱すべく其重大責任を感銘して取扱上飽くまでも慎戒 (Careful) せざるべからざるは固より論を待たず、序に向ほ頭取たる拙者に於て曩日長くも叙勳賜金の御沙汰を蒙むりたることを諸君に披露すべし、是れ蓋し征清事件に關して本行が理財上微力を盡したるに由るものにして頭取は唯々本行の代表者として此恩命を拜したるのみ、即ち全く本行の光榮 (Honour) にして諸君と其慶を共にすべきものなり。

○疾病の保険法

前内務省衛生局長 後 藤 新 平

疾病保険 (Sick insurance) と云ふ事に就きまして諸君に於ても已に御承知になつて居る御座りませうが之は衛生 (Sanitation) 上最も必要の件であります、衛生法中殊に社會衛生法に於て必要の件であります、故に之は社會衛生學即ち救濟衛生科の一部に屬する者であります、此大日本私立衛生會の審事分科の中には救濟衛生科と云ふものが設けてありまするが眞に救濟衛生科に關係しまして論題 (Subject) の出ました事と云ふものは少なかつた、之れはなんてあるかと云ふと私の考へて見まする其團體 (Group) の然らしむる所であらうと思ひます、今や此救濟衛生法の必要 (Necessity) に

迫まるを日に益々甚だしい勢となつて居りますから今日それ御話しをせやうと思ふのである、併し此疾病保険の事は中々一席に盡すべき事ではない且今日は痛く時間に限られて居りますから至つて其總體に就て手短 (Brevity) に申上るより外ない、抑も疾病保険のことは假令其一班又は一部分にせよ之を論じました事は明治廿一年本會の雜誌第六十三號より六十八號迄私が掲げました職業衛生法と云ふ中に散見して居るのが嚆矢 (Beginnings) であります、併し乍ら之は唯目錄 (Catalogue) が出たと云ふても宜しい位の事である、それから其地には所謂社會衛生法に關係して少し出て居ります者が大阪の總會の時と思ひましたが醫學博士 (D. M.) 三宅先生が生命保険 (Life Insurance) の事に就て述べられましたが是れは多少關係のある事であり、併し是れも社會衛生法の點から主として論じたのではない、矢張其一般の生命保険の觀察と

衛生の關係を論じられたものと思つて居ります、先づ第一に茲に掲げた疾病保險法が何ぜ今日必要になつたかと云ふ事を申上げなければならぬ、明治廿一年私は職業衛生法を論じた時は抑も何う云ふ時であるかと云ふ事を考へて見れば一番早く分る此の時は則ち高島炭礦(Takashima coal mine)の問題の起つた時である、高島炭礦の問題と云ふものは何であるか即ち労働社會(Labour circle)が疾病保險其他職業衛生法の必要を喚起した時である、即ち彼等が其必要の急を告げた時である、其後今日に至るまで色々に同盟罷工(Strike)とか又は社會の有様の變化が餘程此急を喚ぶことと考へます其中に於て醫學社會(Physical Society)に於て又醫學社會(Medical Society)に於て此急を喚び起す場合になつて來たと思ひます、夫は何であるかと云ふと醫藥分業の問題などは矢張り其必要を喚び起す一つのものであらうと思ひます、否私は醫學社會又

は醫學社會に於て分業問題の起るに於て社會衛生上の一大急務(A Great urgent work)と云つたならば何であるか即ち疾病保險法と云ふも敢て誣言に非らざること、信じます。

醫藥分業(Division of physic & medicine)に關する衛生行政法の實施に就きましては色々の順序方法がありますけれども此社會衛生法に關係した事の整はぬ間に急變の措置を致しますと云ふとそれが爲めに非常な影響を蒙ることが出て來るかも知れません、其の點におきましては別に論題を設けて述べべき事でありますから今日は述べませぬ、兎に角一般の衛生行政法の上に就きましては亦社會衛生法殊に疾病保險法を研究(Investigate)するの必要になつて來ました。

そして社會衛生法を細折し委しく考究を試みますると通常人に用ゆる社會(Socio-

す)と云ふ字の釋義(Definition)が此に第一必要である、社會と云ふ者は唯人間が奇り集つたから社會と云ふ譯ではない生活力財産其他智識分配の度の同じからざる人々が寄つて段階(Rank)のある様な團體を成すに到りたる者を以て始めて社會と云ふのである、即ち富の分配智識の分配生活力の分配が平等(Equality)に行くべき者でないからして人間社會が平等に行へべき者ないのです、其不平等の爲に自ら等差を生じ其間に生存競争(Struggle of living)の有様を生ずる、そこで最も此博愛(Philanthropy)の心を以て見ると云ふと其中に厭ふべきものが起つて来る、此有様の起るべき團體之はグナイスト氏の言葉を假りると慾情から出た團體を社會と云のである、其の上になり立つたものが國家の團體である、是れまたグナイスト氏の言葉を假りて言ふと徳義(Virtue)の團體である即ち國家であります、それで今の釋義に従ひまして社會衛生法なる

名が出たのであります、此の衛生法はその働きの上から言ふと救濟衛生(Remedial sanitation)とか或は救貧衛生とか云ふ様な名もあるのであります、其の中で疾病保險の法を今日論ずるのであります。

疾病保險法と云ふは疾病金庫と申します、疾病金庫と云ふが疾病保險と言はうが其事體に於ては同じ事である、而して之は保險醫學又保險衛生法中文明生活の國民に缺くべからざる方法である、此疾病金庫の報告は多々ありますけれども併し乍ら此歴史上(Historical)の關係を十九世紀に於て疾病金庫が一大利益を社會に與へた所の報告は千八百八十八年に出しました所の獨逸皇帝陛下が頻りに盡力されることも之に淵源(Origin)して居るのであります、それで其千八百八十八年に出しました報告に最も關係のある沿革(Development)の著明なる時代を言つて見ると千八百八十三年獨逸帝

國法律を以て發布 (Proclamation) されました所の疾病保險法即ち疾病金庫であります、
斯の如きものは彼の國に於て一大必要の方法にして其の能く行はれると行はれざると
は實に人民の休戚 (Welfare) に關係すると云ふ事は疾くに御承知になつて居ることであ
りませうが或は私が之を申しますれば世に所謂ビスマルク政略を申述べると云ふ様
に思召すかも知りませぬが敢て然う云ふ譯では御座りませぬ、唯私は必要と云ふ點
より述べるのであります。

そして先刻私が國體上必要でないから今日まで此の論が熾に起らぬであつたと云
ふことを申述べましたが獨逸國に之が必要である歐洲大陸 (European continent) にも
必要である英國の如き所にも必要である、それと我が國體上に於ては比較して見ると
左程必要でなかつたが今日亦必要になりつゝ行くと云ふことに就ては尙ほ一言を申述べ

べておきたいと思ふ事は我國は人の言ふ通り貧富平均 (Equality of rich & poverty)
の國でありしが今日に於て我國の大勢一變して富める者は日に益々富み貧しき者は益
々貧しいと云ふ境遇となるべき事は色々數多の論文 (Essays) には見るけれども實際人
人の注意する事は少ない、又貧富の度も東京の何所大阪の何所と云ふて段々場所次第
に無告の窮民住所もありませんけれども其の慘狀 (Pitiful condition) と云ふものも倫敦
あたりの慘狀と較べて見ればまだ、其の度は甚しくない様だがそれのみならば又之
を救済する所の方法と云ふものが我國に於ては各個人の懐からして之を出して佛家の
所謂布施同様の方法を以て之を救助 (Rescue) すると云ふ慣習があり詰り日本の救助
法は布施同様である御布施と同じ様に出したのでめる。
併し然う云う慣習があるから左程に此問題を論ずるの必要がなかつたが人民自立

(Selfstand of people) の心を起されなければならぬと云ふことが段々發達して來て然して又社會の生活方法が段々窮迫して來て人民の智識に富むて來るに従つて一個人一個人の布施同様の慈惠 (Mercy) と云ふものは到底目的を達すべきものでないと云ふ譯にあり又一方には經濟學者 (Economist) が合資本會社の道理を發達して以來個人的衛生法は合衆的衛生と變じて合資本會社 (The limited partnership) の運動と同じ様に矢張り衛生法の運動も個人々々の運動に任せずして共同運動で行くと云ふことに成つて來て見れば救濟のことも同じ様に故人の布施に任ずべきものでないと云ふ様な考が餘程熟しかつて來て居る。

然るに先刻申した様に團體が今日までは然うてなかつたから世人の注意尙ほ此の點に等閑 (Neglect) なるを免かれ難き様である、今日以後は唯今申した様に變化しつゝ、

行くのでありますから此疾病保險法の必要は是より生じて行つて如何なる人を補助するものであるやと云ふと無産の法を補助するのである、資産のない者は即ち土地家屋 (Ground & House) がなくして借宅をして居つて日雇賃月給で可なりに今日の生活をやつて行く様なれども一朝事あれば之を救ふの方便がない者である、此類の者が今日澤山あります殊に都府 (Capitals) に於て多いのであります、日々文明の勢力に従つて都府人が輻輳して業務の競争を爲すに従つて斯う云ふ生活は澤山になつて行くのであります、之を救濟する事は傳染病 (Epidemics) の流行に向つても必要である、之は近き例に乏しからぬ併して平素の疾病の保護上に於ても尙ほ必要のものであります、又之が衛生法は富國強兵の基を弼ける所の實を致す方法の一であります、倫敦に於ては衛生救貧局と云ふものが一所になつて居ると云ふ仕かけてありまして大に此救貧のこ

と、衛生と相須て助くる様になつて居ります、之は誠に美事 (Praiseworthy thing) として本邦に於ても人々注目して之に倣はんことを企つることは偶然に非らざる所以て御座りませう。

そこで此疾病保険法が何う事ふものであるかと言ひますると禍福平均法又長短補充法で社會に免るべからざる缺點 (Defect) を補ふものです、唯今申した様に無資産と云へば何もなき貧乏人 (Poor person) と云ふ様に許り用ゐまするがそれも含んで居るが今日相當に暮して居るものも唯手から取つて口を養ふと云ふ丈の事てしかと永久に貯蓄 (Save) する所の財産のない者を指すのであります、然う云ふ者は皆疾病保険の力に據つて數多の禍 (Calamity) を免るゝことを得る、若し之がなかりせば長く疾病に罹つた時分には其禍を家族 (Family) に及ぼす之を防ぐには疾病保険の外ない、此事た

るや實に一般人民に於けるより其勞工 (Labourer) の社會に必要なので今日東京府内に於きましては大工 (Carpenter) 左官 (Plasterer) の如きも夫々組合を立て、ありますけれども其の組合の方法たるやまだ疾病保険の方に充分效を致すほどにはなつて居りませぬ、又官立工場 (Factory) の勞工に對しましては殆んど此の方法はないと申して不可なき次第でございます。

之れが今日の様な急激の變化を以て進みまする世の中であるから益々疾病保険の法がなかつたなれば世の社會學者 (Socialist) が論ずる如く社會黨や其他の急激なる禍を起す所の黨派の養成となつて然うして我々國民の生活に自然禍を醸す所の原因 (Cause) になつて來やうと思ひますから此疾病保険の法が起らなければならぬ、此の法が起らぬ時は一朝某戸主 (Master) が病に罹つたときは遂に全戸糧を失ふに至る。

○世界永遠の平和と帝國の主張
(Eternal peace of the world & insistence of the empire)

尾崎行雄

今日は久し振りに此所へ参りまして詰まり帝國に於て高等なる教育 (Education) を既に済し若しくは受けつゝある諸君に卑見を申述べて批評を求むる事を得るを以て、甚だ愉快 (Pleasant) なる事柄として出たのであります。

然るにと申しては失禮でありますが一寸先刻來の模様を拜見致しますると、どうやら帝國議會 (Imperial parliament) の中に這入つた様な感じをいたすのであります。帝國議會に於ては大分屢々喋舌り過ぎて随つて彌次られたり愚弄 (Ridicule) されたり

致しまするが、是はまあ三十年近く慣れて居りますから、聞き苦しい批評 (Critique) も馬耳東風に付し來つたのである、併し乍ら高等なる教育を既に受け若くは受けつゝある諸君に向つて、意見を述べらるに當つては帝國議會に於けるよりか、より立派なる待遇 (Treatment) を受ける事と待設け、又同じ其希望を全く捨てゝは居らぬのであります。

愈々是から捨てなければならぬか、或は希望を満足し得るかと云ふ事は、爾後三四十分間の間に諸君と私との關係で極まるのであります。

此所て御話を致して宜いか否やは問題で有りまするけれども、今日は目下の日本帝國の有様に對して、比較的重大 (Comparative important) なりと思ふ事柄、即ち外交關係に付て、私が帝國議會に於て少しは述べ又大部分は述べんと欲して未だ述べ得な

かつた事を、國家の爲めに述べて諸君の愛國的御批判(Patriotic critique)に訴へて見たいと思ふのである、其の事柄が若し帝國の利益になる様な事柄がありましたならば、それは私の最も遺憾とする所でありますが故に、何卒それを批判するに當つても、申すまでもなく、愛國の見地より善惡共御批評あらむ事を希望致します。

目下私が最も遺憾(Sorry)に堪へぬ事は、帝國の位置に對するだけの働きが、朝野官民(Government & people)の間に行はれて居らぬかの如く感ずる、即ち其責任の一部分は私も、不肖(Stupid)乍らも免れぬので有りますから敢て人のみを咎むるのではありません、併せて己れをも咎むるので有ります。

第一日本は現在世界の大變局に際してどれだけの事柄を擔任(Charge)して居りまするかと申しますれば印度以來殆ど八億(Eight hundred millions)の人間の住んで居る

大局面の治安は先づ日本の獨力(Single power)で維持して居ると云ふ事が一言にして最も盡し得る事と思ふ状態であらうと思ひます、全世界の人口は確かにどれだけあるか知りませぬが、僅か十六億位と承つて居ります、然らば日本が獨力で八億の人口の住んで居る地盤の治安を維持して居ると云ふ事は、全世界を兩分して在る如く相當に擔當して行き得ると云ふ事は非常なる誇(Pride)と思ひます、若し日本が聯合與國の中に居らずして純然たる局外中立(Neutrality)の位置に居つたならば印度の治安は甚だ懸念(Anxious)である。

支那は内亂に止まらずして膠州灣を根據(Basis)として敵國(Hostile country)の手に依つて餘程の安寧を害されて居るでありませう、西比利亞方面は無論の事、獨逸勢力と今日結ぶ状態になつて獨逸と多少の氣脈あり脈絡ありと聞えたる露國人との手

に依つて餘程の程度迄敵國の手が延びて居るでありませう、唯だ幸にして日本が聯合
與國 (Alliance) の側に立つて居るが爲めに、印度以來、南洋、西比利亞方面まで東洋
として殆ど敵國の手は延びて居らぬと云ふ状態であつて其責任は日本が背負つて居る
のであります、既に是だけの局面を擔當して居る以上は、それに相當なる位置 (Position)
(Position) を世界に於て日本は持たねばなりません、又官民朝野共に其自覺 (Consciousness)
に依つて一舉一動總て行はなければならぬことは又言を俟たぬ次第であります。

然るに實際の状態は帝國議會に於て公にされて居るが如く歐羅巴の聯合與國、其中
でも殊に親しかるべき同盟國英吉利が他日平和會議 (Peace conference) の基礎條件と
なるべき大問題を世界に向つて公表して一個の政治家として公表するのではない、英
吉利の總理大臣 (Prime minister) として政府を代表し國民を代表し、全世界に互る所

の英吉利大帝國を代表して大帝國の意見なりとして發表するに當つて、我が同盟國に
照會 (Introduction) があつたかと問へば一切ないと當局者は答へるのみならず恰かも
當然の事であるかの如き様子で答へるのである。

従來の如く外交を總て秘密 (Secret) に附し、外交と言へば宮廷 (Imperial palace)
の關係が若くは政府二三の有力者と有力者との關係であつて國民は一切與り知らぬと
云ふ時代に於てならば今日發表した所の意見と平和會議の場合に於ては幾許か取替へ
る事も出来、抜き差しも出来るか知れませぬけれども今日は申すまでもなく時勢全く
一變して英吉利の責任ある政治家も亞米利加の大統領 (President) は無論のこと、秘密
談判を斷然廢して、外交は總て國民と共に國論を以てせねばならぬ、何時開かるゝか
知らぬが、來るべき平和會議の際の如きは其談判交渉を公開する必要ありと云ふ事を

責任ある亞米利加の大統領の如きは一回ならず二回も天下に向つて公言し、其の公言の下にこれが大體の基礎であると言つて世の中に發表する以上は他日形勢 (Futures) が非常な大變化があれば格別、然らざる以上は大體に於て之を改める事が出来なすのは無論で有ります、而して英吉利總理大臣の發表した意見は電報 (Telegram) に依つて諸君の御承知の如く色々な事が有りますけれど或は軍閥打破 (Destruction of Militarism) 或はデモクラシイの基礎に依つて總ての仕事をする、民本主義と譯しても民主主義 (Popularity) と譯しても詰まりデモクラシイと云ふの翻譯 (Translation) に過ぎない、デモクラチックなエジプトに依つて世界の列國に政治をしなければならぬ、又植民地 (Colony) 各處の占領地の如きは民族自決主義民族が自から何れに屬し何れに戻ると云ふ事は其處に住んで居る民族多數の意見に依つて極まると云ふことも一つの

Democracy

個條として出して居る。

斯の如きものを幾つも澤山並べて遂には千八百七十一年に獨逸の爲めに收られたアルサス・ローレンの如きも之を佛蘭西に返すまでは決して刀を鞘に收めぬと云ふことを力を強めて言つて居る、是等の事も形勢の變化 (Change) に依つて或程度までは變化して行くか知れませぬが屢々提言して國論を固めて行く、獨り一國の輿論でない聯合輿論の輿論を確定して行つて了つた以上は他日に開かるべき平和會議の席に於て大體に於て其根本を改めることの出来ないのは疑ひを容れない、どうしても是は出来なす、而して改めなければ即ち日英同盟條約 (Treaty of Anglo-japanese alliance) の單獨講和は致さぬと云ふ明文を形式的に解釋すれば日本に照會せなすて宜しいと云ふ様に云ふ代言理屈は無論付きませす、倫敦宣言 (London declaration) の解釋も此れも牴觸

(Confliat) した事も出来ず、併し乍ら精神的に單獨講和を致さぬと云ふ日英同盟の明文 (Spiritually) 倫敦宣言の明文を精神的に解釋すれば平和會議の根本となるべきものを我が帝國に謀らずして向ふ同志に極めて發表すると云ふ事は確かに同盟條約及倫敦宣言の精神に違背 (Against) して居る事柄である、其事を一切帝國に照會致さぬ、帝國政府は照會を受けずして之れを當然なりと考へて、それに向つて一應の交渉談判すらも開いて居らぬので有ります。

而して其結果 (Result) はどうなるか若し民族自決主義と云ふ事を主義として賛成すれば膠州灣の問題、南洋諸島の問題、矢張り其條規に依つて、作規の範圍内に這入る、膠州灣に住んで居る支那人をして投票 (Vote) せしめたなれば日本に從屬したいと云ふ投票を入れるか、支那に戻りたいと云ふ投票を入れるか、殆ど論ずるの必要ないかと

思ひます、南洋占領地には如何なる土人が住んで居るか確かには知らないけれども是等に投票させてもどうか日本帝國の版圖 (Dominion) の中に入れて貰ひたいと云ふ投票を果してするか、せないかは疑問 (Question) である、況んや四十七八年前の刀の先きで取られたアルサス・ローレン二國の恢復 (Recovery) と主義に依つて是認すると云ふ事になりますれば彌來刀の先きで遣り取りをした所の地面は皆問題として訂正して行かなければならぬ、と云ふ事に主義上なる、印度も、埃及も、安南も、印度支那も甚だしきに至つては敵國から云ふなれば臺灣朝鮮の如きもアルサス・ローレンと同じ程度の問題であると敵國からは言へる根據を與へると云ふことにもなるかも知れない實に由々敷大事だと云ふても宜いと私共は思ふので有ります、去りとして佛蘭西人が假令どう云ふ事情あるにもせよ、兎に角千八百七十一年以來常に寢食を忘れて恢復致し

たゞと熱烈 (Urgently) に主張し來つたるアルサス・ローレンを出來るならば此機會に於て佛蘭西に戻 (Return) して貰ひたいと云ふ情は私共も、人に後れず持つて居ります。

併し乍らそれは情であります、主義として賛成するのではなく、特別の事件として義俠的 (Chivalrous) に私共は無限の同情 (Sympathy) を佛蘭西人民に向つて表するのである、主義としては賛成は容易に出來る問題では有りませぬ、況んやアルサス・ローレンが獨逸に取られたと云ふ其の原因に遡つて見ますればナポレオン三世の不明から戰が破られて取られたのであつて其中に住んで居る多數の人民は獨逸人であつて佛蘭西語 (French language) を話せる者は十分の一か二しか居らぬと云ふアルサス・ローレンである、それを主義としてどうしても佛蘭西に取戻さなければならぬと云ふ事

は帝國政府として、どうしても出來る事かも知れませぬが直接 (Directly) には出來るものでなす。

恰かもそれはさうすべきものであるが如く歐羅巴列國の責任ある政治家が述べてもそれに對して黙つて居ると云ふ事は既に危險 (Dangerous) なる形勢を馴致すべき種子 (Seeds) が蒔かれつゝあると云ふ事は申して差支ないかと思ひます。

故に是等の點に付ては私は帝國の位置に對して歐米の政治家は殊に同盟國たる英吉利の政治家は日本帝國に向つてはもう少し交渉を頻繁 (Busy) にすべきものではないかと云ふ疑と云ふよりか寧ろ不平 (Complaint) を持つて居るものであります。

此の不平を隠して置けば同盟國の關係はだん／＼乖離 (Apart) して行くのである、寧ろ之を述べて將來改むれば此同盟は益々鞏固になるのであります。故に若し世

間に私と同様な意見、不平を持つて居る者があるならば遠慮 (Reserve) なく之を公にして向ふの政治家の考慮を求めると云ふ事は日英同盟の實を挙げ益々親密にする手段になりはせぬかと信じて居るが故に私は之を言ふのである、決して兩國の關係を疎隔 (Separate) する爲めに言ふのでない、今日の日英同盟は帝國外交の樞軸 (Center) であるのみならず世界全局面に影響を及ぼして居る所の非常に大切な完全體とも柱石の一部とも云ふべきものでありまするが故に此關係は是非共益々親密にして行きたい、親密にして行く上には面白くない事は隠して置かず兩國御互に言ひ合つてそれを改めて行くと云ふ事が親密を進むる所の最大要件 (Most important condition) と信じて居りまするが故に諸君の前に之を言つて而して公平なる御判斷に訴へるのであります。又戦争 (War) の局面は漸次進展して居つて曩に三年有餘の前に開戦をした時とは全

く形勢が違つて居ると云ふ事を知るの必要があると思ひまするけれども帝國政府及帝國人民の代表者たる議員の一部分の如きはそれを承知して居らぬ様に見えます、例へば私が戦争の目的に付て質問を致しますると戦争の目的は大正三年に發布されたる所の宣戦の詔勅 (Imperial declaration of war) に盡きて居つてそれ以外に何もないと云ふ事は外務大臣が公開の席上に於て公言したる言葉であります、私は是を聞いて非常に驚いた、宣戦の詔勅を捧讀した諸君は必ず御記憶 (Memory) でありませうが、是は戦争の目的と云ふよりか寧ろ戦争の原因を明かにし賜うた詔書であります、但し戦争の原因は其全部若くは一部分は目的ともなり得るものでありますから原因と目的は共通 (Common) の點も有りまする故に純粹 (Pure) の原因だけであつて目的は一切中に包含して居らぬと云ふ事は私は云うのでは有りませぬが兎に角彼の詔書は三年有

餘の以前に日英同盟條約あるが爲めに戰を開いたと云う趣意 (Purpose) 東洋の平和が攪亂されるが故に同盟條約に依つて印度以東の地に限つて居る地域だけに於ては日本が參加すると云ふのは宣戰の詔勅に見えてあつて、其當時に於ては全く日英同盟條約の誼に依つて此戰に參加 (Accompany) したと云うので有ります、若し彼の時に於て日英同盟條約と云う事がなかつたならば何人が政局に立つて居つても恐らく彼の時期に於て獨逸に對して開戰はしなかつたであらうと思ひます、歐羅巴に戰端が開けたと云う其時に於ては英吉利ですら直ちに開戰はしなかつた、白耳義の中立が蹂躪 (Overrun) されるに及んで是が保障者たる英吉利が、其國の體面に對しても座視して居る譯けに參りませぬ故に、白耳義の中立維持と云ふ名義の下に刀を抜いたのである、併し乍ら東洋に居る處の日本は白耳義中立の保障者 (Guarantor) でもなし、中立の侵さる

ると云ふ事は面白くない事では有ります、去りとして白耳義の中立を侵したと云ふ一時に依つて直ちに獨逸と開戰 (Open War) するの必要は誰が考へてもなからうと思ひます、即彼の當時に於ては同盟條約なかりせば多分帝國は彼の當時に於て獨逸に向つて開戰はしなかつたであらうと云う想像は先づ當れる想像と認めなければならぬ。然るに其以後日英同盟條約の誼に依つて開戰をした以上は其の働く所の地域も同盟條約の明文 (Document) に規定されて居る所では印度以東と云ふ事に限りあるのは是は戰前が發展を致すのみならず獨逸の行爲や白耳義の中立を蹂躪せるに止まらずして凡そ是迄國際公法 (International Law) に認められて居つた事も之を破る事に少しも躊躇しなす。

國際道徳も蹂躪され、戰鬥員 (Fightingmen) の外は濫りに殺戮 (Massacre) を加えぬ

と云ふ事は何處でも認められた事でありまして、是も遠慮會釋なく女でも子供でも殺戮する、遂には無限 (Infinite) の潜航艇戦を開始して中立國の商船であらうが、何であらうが片つ端から出會次第に之を撃沈 (Sink) して仕舞ふと云ふまでに至つたのである、戦争と云ふものは元來道理に基いた事でないとは思ひますけれども併ながら従來は戦争の中によりまして一定の條規があつた交戦條規がある、國際法規が尊敬 (Respect) されて居つたのでありますけれども、獨逸の今回の遣り方は一切夫等を蹂躪して、嘗てはダム／＼彈丸の使用すら咎めたる所の歐羅巴で有り乍ら今日は毒瓦斯 (Poisonous) であらうとも熱流であらうとも凡そ人を殺すに足るものであるならば如何なるものでも用ひる事を避けぬと云ふ迄に世の中は禽獸狀態 (Animal state) になり來つたのであります、殆んど人間界の殺戮とは思はれぬ程の状態になつたのであり

ます、之に對して主たる責任者は申す迄もなく獨逸で有りまして、けれども亦他の列國も稍やそれに対応 (Respond) するだけの仕事を已むを得ずやつて居りまするが故に、獨り獨逸のみを咎むる譯には後世の歴史家 (Historian) として出來ませぬが知れませぬけれども兎に角戦争の局面と云ふものは昔からして人間と人間との戦ひであつたが、今日は禽獸の戦ひと同じ事で苟くも強きものは如何なる手段を以ても弱者 (Weakness) の肉を食つて宜しいと云ふ状態になつて居る、之を是認して置けば全世界は純粹たる禽獸狀態、即ち戦争に關係する範圍内に於ては規律も法規も何も無い禽獸状態に立入つて居るのである。

茲に於て全く局外に立つて居つて然るべき、音に然るべき所ではない、局外に立つて居つて此戦争を少しでも早く人類の爲めに休止せしむべき仲裁者 (Arbitrator) の

位置に立つて居つた所の米國政府の如きも、此形勢を座視するに忍びずして兎に角戦
ひの仲間に這入つた、續いて戰鬥力を持たない所の支那すらも此仲間に這入つた、帝
國は之を勧誘(Encourage)するに當つて幾分の力を致した、此時に於ては日英同盟の
誼に依つて立つたと云ふ其時とは全く帝國の位置も世界の形勢も變化して居ると云ふ
事はどうしても認識(Recognise)せざるを得なす。

最初に返つて言へば開戰當初には日英同盟條約がなかつたならば、日本帝國は多分
誰が政局に立つて居つても開戰はあの時に於てしなかつたか知れませぬと思ひます
けれども、既に亞米利加も参加し支那も参加すると云ふ此時期に於ては帝國は日英同
盟條約が無くても多分之に参加せざるを得ぬ形勢で人民も政府も官民共に之を認め
てあらうと私は想像(Suppose)致します。

隣りの支那をすらも帝國が勧誘した、是には同盟の規約も何もない、支那をすらも帝
國政府が勧誘するに手傳つたと云ふ次第である、而して假に日英同盟條約なしと雖も
此場合に於ては帝國たるものは多分支那を戦ひに誘ふ前に参加したてあらうと思はれ
る、即ち同盟條約の誼に依つて立つたと云ふ時とは全く局面は大進展を致して第二期
第三期の戦ひに入れると稱しても先づ差支ない状態と思ひます、申す迄もなく茲に至
れば常に東洋(Orient)の平和を維持すると云ふだけでは濟まぬ、平和と云ふそれよ
り以上の使命(Mission)を帯びて居る、即ち世界が禽獸状態に立至つて帝國は全世界
の天理(Previdence Humanity)人道を維持する爲めに多少貢獻(Contribute)すると云
ふ事が此の場合に於ける帝國の任務でなければならぬ、即ち始めは東洋の平和を維持
するだけで宜かつたと思ひますけれども其場合に於ては世界の正義人道を維持すると

云ふ爲めに帝國も幾許か手傳はなければならぬ。

若しも此儘で行つたならば條約なるものは總て蹂躪され將來何物も片端から之を破壊して差支ないと云ふ事になる。

其上に物質的發明 (Substantial invention) は非常に發達して其上益々進歩致して無規律無制限の惡戰苦闘が他日行はれますれば人類は滅絶 (Extinction) するて有りませう。

今日の如き人殺しの機械の進歩の程度では殆ど人類の前途はどうなる事か分らぬ、此の世界の戦が一二年も續いたならば歐羅巴列國の壯丁 (Youngmen) は殆んど大部分盡きはしないかと云ふ状態て有りませうが故に此無規律なる時代が持續されて數十年の後迄及んで、機械的方面 (Mechanical side) 其他に一層發達をした場合に於て、再

び禽獸的戰爭が起つたならば多分人類が盡きる迄戦はなければ平和は恢復されぬと云ふ状態になるか知れぬ、多分ならうと思ひます、機械の進歩 (Progress) を今日の程度に進めて行つたなれば、其場合に至りましたならば、日本は東洋數千里の外、隔在し居ると云ふだけで決して枕を高くして安心して行く譯に參りませぬから、帝國一個の爲めにも世界人道の爲めにも、どうしても禽獸状態に陥るのを防ぐべき大使命を帯び、其中に這人つて行かなければならぬと云ふことは帝國の責任の一部分であると思ふ、單に東洋の平和を維持する丈けて満足すべき時代でないと思へられる。

然るに翻つて其大使命に對する政策手段方面 (Policy, means, plan) 等がどれ丈け研究されて居るかと云ふ事を虚心平氣 (Presence of mind) に探究して見ますると何等の研究が出来て居らぬ、何等の講究が出来て居らぬ、第一期戦時代の目的となるべき東

洋の平和を維持すると云ふ丈けに致しましてもどうしても東洋南洋に於て軍事的領地現に日本が占領して居る地點の如きはどうしても平和維持の必要上何時迄も帝國の手に掌握 (Hold) して置かなければ無論平和を維持する事が出来ぬと思ひます、其上に東清鐵道、西比利亞の東部、此處らにも獨逸政府が侵入 (Invasion) して來ない丈けのちやんと設備をして置かなければ東洋の平和は維持せんと欲して維持する事が出来ぬと思ひます、今日の狀態であれば獨逸が潛航艇 (Submarine) 若くは飛行機を携帶して、西比利亞鐵道に依つて黒龍江線に轉じて日本海岸に之を持つて來て、其所で仕組んで潛航艇若くは飛行機を日本に向つて使用することは出來ない仕事ではないと云ふ事だけは少しく其途を心得て居る人は大抵認識します、而して西比利亞には平時 (Peacetime) と雖も獨逸勢力が這入つて商賣人 (Merchant) の手先も非常に這入つて、有

力なる者が商店等を開いて居る、現在に於ては西比利亞だけで八萬以上の獨逸の屈竟なる俘虜 (Prisoners) が居る、殆ど自由開放 (Liberty) の身となつて窃かに他の獨逸勢力と連鎖 (Series) を圖りつゝ働いて居る、更に奥に這入れば十數萬の俘虜が居るのであります、武器 (Weapons) を與へれば直ちに——戰爭の初期に於て俘虜になつたのでありますから夫等のものは西比利亞の奥に於て直ちに劍 (Sword) を握つて立つ事が出来るのであります。

それと連絡してさうして働かすべき機關が總て備はつて居るのであります、其時に於て西比利亞に對して何等日本の成すべき所がないのみならず東清鐵道の管理方 (Administration) に付てすら何等交渉して居らぬ、哈爾濱から南に下る所の東清鐵道は或部分迄日本帝國に讓受けると云ふ事が最初は秘密交渉であつたが、それも目下の

所戰役の爲に挫折して居るのである、それすら今尙ほ實行(Unreasonable)されて居らぬ、是は又一面から言へば無理ならぬ事であつて相手にすべき露國の政府がないのでありますから之をするには特別に考へを廻らさなければ唯だ當り前の手續(Procedure)は出来ないと云ふ然も其場合に於てすら帝國政府は露西亞があれだけ亂れて東部西比利亞滿洲等が危険状態に陥つても之に向つて何等成すことの考を一向持たず、手を拱いて見て居つた場合に亞米利加の特派使節(Special message)ノートは露西亞に踏込んで行つて、東部西比利亞、カムチャツカ各種の方面に向つて亞米利加の勢力を扶植(Plant)すべき所の秘密協定は相立つたのである、現に西比利亞鐵道の如きは亞米利加の資本を以て改良し亞米利加の技師(Engineer)に依つて之を運轉し總て亞米利加からして人を入れ金を入れて之を擴張改良を致して聯合與國の便利を圖り決して亞米

利加のみの私利(Private interest)を圖る爲には有りませぬから、其意味に御聞取りを願ひます。

亞米利加政府の爲したるを批難(Blanche)するが爲に之を云ふのでない、帝國政府の無爲にして爲すことなく、此方は懷中(Pocketing hands)をして居る間に亞米利加のノート特使は露西亞に踏込んでそれだけの事をして了つた、其結果として亞米利加の鐵道技師は三百人の専門技術家を率ゐて乗込んで來た、幸か不幸か此時露西亞は亂れて了つて西比利亞全部如何ともすべからざる有様になりましたから折角亞米利加から派遣(Despatch)した所の三百人内外の技師が引返して横濱に居りましたが今でも猶ほ何か計畫する爲に歸らずに居るかも知れませぬ、多分居るかも知れませぬ、さう云ふ次第で若し露西亞の不幸なる事柄が斯くして進行したならば名義(Title)は兎に角事

實は西比利亞鐵道、東清鐵道は亞米利加政府の管理の下に置かれる、人民と云つても會社と云つても、どちらでも兎に角米國管理の下に歸すると云ふ事が疑ひを容れる事の出来ない状態となつて來たのであります、私は決して亞米利加の手の延びることを批難攻撃するものでありませぬが、亞米利加が聯合與國の爲に西比利亞鐵道 (Taiti-Way) 及東清鐵道の改良擴張をする事が出来るならば、日本にも出来る譯である、茲に於て亞米利加にさせた方が聯合與國の爲になるか、日本がした方が聯合與國の爲になるか又日本單獨の見地から言へばどちらが宜いかと云ふ問題になる、單獨の見地から申しますれば論ずる必要はない、亞米利加にさせるより日本にさせた方が日本の利益になるに極まつて居る、併し日本てやれば聯合與國の不利となるならば是は多少考慮の餘地がありますけれども亞米利加ならば聯合與國の利益になる、日本がすれ

ば不利益になると云ふ道理が事實には乏しい様に思ひまするが爲に、聯合與國の爲に取つても地理上 (Geographical) から見ても最も便利なる日本に此仕事をさせる方が利益であること云ふことは計數 (Calculation) の上に於ては明かであらうと思ひます、それ程明らかなことすらも日本はなさぬのである、又なさうとする考へもない、手段も施さないのであります、茲に於てルート特使は態々亞米利加から遠く出て來て日本の近海 (Adjoining sea) を通つたか港 (Barbour) に泊したか知りませぬ、日本政府には少しも交渉をせず直ちに浦鹽斯德から彼得俱羅士に乗込んで當時の露西亞政府と協定して、亞米利加政府の働きの敏捷 (Clever) を示すと共に其反面 (Opposite side) に於ては日本政府の働きの何を示すのでありますか、適當な言葉を使ひますと罵詈 (Abus) になりますから、私は適當なる言葉を使はない、日本政府は何もなさぬ無爲で居つた

と云ふ不適當なる言葉て之を形容して置きませう、然らば一期戦て目的となるべき所の日英同盟條約に依つて立つたと云ふ一期戦の目的であるべき所の東洋の平和を維持すると云ふことをすら少しも執つて居らぬ、口では維持すると云ふのであるが事實には維持する手段方法を執らないのである、其手段方法に向つては更に手段を執つて居らなければならぬ筈である。

但し一つ膠州灣及南洋の占領地はどうかして永遠日本で持つて居りたいと云ふ考へは遠が今の政府でも持つたものと見える、故に之に對しては多少の一涉等を開いた結果、非公式に羅馬法王の提議(Proposition)に對する回答であつたか或は亞米利加大統領の最初の仲裁條件に關する回答であつたか知れませんが、兎に角列國聯合して仲裁條規に對する回答を發するに當つて膠州灣及南洋の問題に書いてなかつた、

日本政府は入れやうと努めなかつたが爲に閉却(Forget)されたのであるが努めても略されたのであるか書いてなかつた。

茲に於て世間には當初多少の物議(Provocation)が起つた結果此問題に付ては交渉したものと見えまして其揚句或は非公式に其回答にはアルサス・ローレンの問題が書いてなかつたと云ふ事は其權利を捨てたものでないから、南洋諸島も膠州灣もアルサス・ローレンと同様に御承知あつて然るべくと云ふ佛蘭西公使から半公半私の書信(Letters)があつたと見えまして、先づ是が我が政府の虎の巻と今日はなつて居るのであります。

併しアルサス・ローレンは未だ收つて居らぬ場所て有ります、聯合諸國は未だ何時迄やつたら收る事が出来るか不明(Vague)であると想像さるべき場所である、收る事

の未來に屬するものと同一程度に取扱はれると云ふ事を以て虎の巻と致すに至つては是は甚だ心細い (Ughsy) やり方と先づ評さざるを得ぬのである、況んやアルサス・ローレンの恢復を以て講和の重大なる條件とする以上は此講和は獨逸が全部無條件降伏 (Totale unconditional surrender) 同様の状態に陥つた時でなければ是は實行出来ない問題と思ひます、外の事で窮迫すれば窮迫するだけ獨逸もだん／＼譲り合せてせうが併し乍らアルサス・ローレンは元來獨逸の領分 (Dominion) であつた所のものを佛蘭西に武力で取られた、中に住んで居る者は大部分獨逸人である、それをナポレオン三世の時に戰勝の結果として元の獨逸に取戻された、其地面は佛蘭西が占領し得ないのである、將來占領するかも知れないが併し先づ今日の場合に於ては獨逸の全敗北 (Defeat) をした時でなければ決して占領が出来ないと思ふ、あう云ふものを取戻さなければ平

和を結ばぬとする事が若し重大なる條件とするならば此戰はどうしても獨逸が足腰の立たない迄にならなければ殆ど無條件降伏の状態に陥らなければ平和を結ぶ事が出来ない事と先づ見なければならぬ、平和が出来なければ日本はどうしても其戰爭の御供 (Attendant) をしなければならぬ、倫敦宣言の明文に依り日英同盟條件の明文に依つて而して其基礎條件は向ふて勝手に定められたものである、故に之を事實から見ますれば向ふが勝手に定めたる事で有りまするが故に日本帝國は何處までも御供をして行つて向ふの言ひなり次第に御供をしなければならぬと云ふ状態に陥るので有ります、日本も亦國家の體面上、利害上 (On national honour interest) 甚だ等閑視すべからざる事柄と言はなければならぬ、併し是は東洋問題だけに對して起つた輿論で有りまするが、世界の大局面に對して

條約の神聖(Divine)を恢復し人間世界に是まで行はれて來つた道理を維持し而して永遠の平和を維持しやうと云ふ局面に入つた以上は帝國も亦之に手傳ひ高尚(Noble)なる崇高(Honorable)なる任務を負つた以上は相當なる手段方法がなければならぬ。

其手段方法として歐米與國の政治家は大分個條を多く並べて居ります、併乍ら帝國政府は、彼の人々が提出した其平和、世界の平和の維持の要件の外に帝國政府も人民も、それ以上の方針を吾から持出す事の出来ないと言ふ程に貧弱でない、可なり宜い事を亞米利加の大統領も英吉利の總理大臣も言つて居る、大體に於ては我々も一と通り同意の出来る事を申して居ります、けれども、其演説を一讀した所によれば極めて不徹底(Unconclude)なものであり不完全(Imperfect)なものであつて、あの様な平和と世界全體の平和を遺憾なく維持すると云ふ事は思ひも依らぬと云ふ事が誰でも思

ひ及ぶので有ります、何故帝國は其不完全なる主張に向つて更に一步を進める所の提議をなして彼の人々に考慮(Thought)を促さぬので有りますか、帝國政府及人民はあれ以上の主張(Advocation)は一つも出さず事が出来ぬので有りますか、決して左様な事はない筈である、彼の主張なく不徹底不完全なる條件に向つて、之をもつと完全に高尚になすべき提議は誰にでも出来る筈である、其一例を見ました所がデモクラシイであるとか、軍閥を打破するとか、民族主義を應用(Apply)すると云ふ様な事を如何に言つた所が、それだけでどうして永遠の平和が維持が出来ます、本統の永遠の平和を維持しようと思へば、何は措置さ、もう少し天理人道に適つた仕事を總ての聯合與國がやると云ふ事なければ決して永遠の平和は維持が出来ぬ、世界の平和は天理に背いて人道に背いて維持する事が出来ませぬ、天理人道に背いて刀の先きのみで永遠の平和

を維持する事は断じて出来ないのて有ります、而して今日の文明は有らゆる方面に於て不徹底不完全で有ります、其一例を擧げて見れば是は國際關係ではないけれども禽獸虐待(Animal oppression)と言へば牛馬を虐待するものがあれば、可愛相(Pitiable)だと言つて涙を流して居るが、人間を虐殺すれば名譽である。勝利であると勇躍(Doing)する様な人間である、識者から見れば殆んど狂者(Lunatic)である。

牛馬を虐待すれば泣き、人間を虐待すれば名譽である、勝利であると言つて勇躍する人間である、さう云う風に思想感情の根柢が間違つて居る、一方に於ては毒瓦斯を使つて人類を虐殺して居るかと思へば一方では赤十字(Red cross)を設けて敵をも救うと云ふ、そんな慈愛心(Benevolence)があつたならば戦争をせぬ方が宜い。

丸て人間の文明(Civilization)は不徹底と云ふより虚偽に依つて人類の文明は築かれ

て居ります。

此の虚偽の文明に謳歌(Approve)して今日まで盲(Blind)同様に進んで來た結果、世界の大戦となつて今日は人類社會の押詰(The end)りであると云ふ事は是は識者から見れば當然の事である、間違つた土臺(Foundation)の上に立つ者は、間違つたる結果に到着すると云ふ事は當然であつて、而して今日の文明なるものは殆ど不徹底を極めて居るものである。

嘗て我が公使が未だ露西亞が戦争を開かざる以前ペートルスブルグに居つて頻りに國際公法を引出して談判(Consult)致しますると、露西亞の政治家がチツヨトと言つて内所に、貴下國際公法と仰しやいますけれども國際公法は弱者の道具であつて強國は如何にして國際公法を破るべきかと云ふ事を苦心して研究して居りますから、そんな

野暮 (Boorish) な事を言つてはあけなひと言つて注意を受けた事がある、それが實際に全く虚偽 (Utrine) の理屈を捏ねて欺くのは今日の文明の骨子になつて居るが、それを根柢から改めなければ世界永遠の平和を維持する事が出来るものでない、人間が偏頗不正不義 (Partiality, unjust immorality) の觀念を持つて居る以上は世界の戦ひと云ふものはどうしても止まぬのである。

先づ之を國際關係に付て一二日本に託して然るべきと思ふものを、申しますれば歐米列國は己れより力の弱いと思ふ國に對しては色々の事を云ふ、例へば隣邦の支那に向つては門戸開放機會均等 (Open-door & equal opportunity) 日本も其中に入つて不同意であると云ふ事を頻りに迫つて居る、自分の國には門戸閉鎖機會不均等と同一な行爲を執つて居る、亞米利加では東洋人、日本人も支那人も容易に入れない門戸は閉

鎖されて居る。

種別待遇 (Racial treatment) を與へ機會は不均等である、亞細亞に向うては門戸開放機會均等を唱へて、自己は門戸閉鎖機會不均等を唱へて居ると云ふ事では、どうして世界の平和は維持して行く事が出来ませうか、支那や日本が遠慮して居る間は成る程それで維持が出来ませうけれども苟くも對等 (Equal right) の權利を主張する事になれば其一點でも平和は破れるては有りませぬか、英吉利は同盟國 (Allied power) である、佛蘭西も亦協商國 (Conventional country) である。

所が折角改正せられたる所の我が條約なるものは佛領の印度、安南には行はれて居らぬのではないか、同盟國の印度にも行はれて居らぬのではないか、支那に向つて機會均等を高唱 (Insist upon) する英吉利が植民地の濠洲に於て全部之を閉鎖して支那人

も日本人も入れないのではないか、是又不徹底の甚だしきものである。

凡そ一方に於て土地が剩つて人が少ない、一方に於ては人が剩つて居れば、世界の何れの所でもさう云ふ處があれば溢るゝ水が低きに流るゝが如く、厚い人口が薄い所に流れて行くのは是は天理 (Reasonable) である、人道である、之を閉鎖して弱國の人間は入れないと云つて武力で以て之を閉鎖すると云ふのは、低きに附くべき水を堰堤 (Dank) の力に依つて一時之を堰止めて置くと同じである、水の分量が少ければ堰止めて置く事も出来ませうが、日本の人口の如く年々歳々多量に殖え (Increase) て行く時にはどうして終局まで堰止めて行く事が出来ずか堰止ると云ふ事が出来ぬとなれば洪水 (Flood) 汎濫する、之を國際關係からみれば平和の破るゝ時である、故に眞に平和を維持する心があるならば是等の事に付ては天理人道にも少し従う、道を尊

重 (Respect) する事を帝國政府の主張として世界に向つて唱へて差支ないことでないかと思ふので有ります。彼の人々は歐米諸國は多年優越 (Excellent) の位置を占め來つて、白人種 (White race) 以外のものを劣等人種 (Inferior race) として扱ひ來つた癖 (Inclination) が餘り長く付いたもので有りますから、此見易き道理も他人が之を唱へなければ自からは氣が付かぬと同じ様に氣が付いて居らぬと思ふ。

色々な事を考へてウキルソン大統領も、英宰相ロイドジョウチも唱へて居りますから、此事はどうしても唱へなければならぬと思ひますが所が彼等は唱へないのは習慣 (Custom) の久しき氣が付かぬに違ひないと思ひます、此例は外にもあるもので有りますから、彼の人々が氣が付かずして而して誰が見ても公平 (Fair) なる人から見れば識者と不識者たるを問はず十分に賛成しなければならぬ、と云ふ事柄に付ては帝國政府

は今日に於て之を天下に唱へて彼の歐米政治家の考慮に訴へて置くと思ふ事は適當なる手段であつて即ち全世界の平和に貢献ある所以の一つではないかと思ふので有りませ、而して我々も亦主張を提出して列國に考慮を促す以上は之に伴ふ所の努力(Exertion)も致すと云ふ事を以て天下に發表して一向差支なし。

今日は歐羅巴に於ては日本の努力が足らぬと云ふ苦情(Complaint)を頻りに申しませ、道理は別問題として實際の事實として之を申します、嘗に在野の政治家が申すのみならず佛蘭西の首相クレマソーの新任(Newly appointed)の言葉にも一層の努力を希望すると云ふ事が事實書いてあつたかと思ふ、即ち未だ日本の努力が足らないと云ふ事を心の底に感じて居るので有ります、始めに申した通世界一般の平和を双肩に擔つて立つて居るのに尙不足を言はれるといふ事は、如何にも我れから見れば不思議

(Wonderful)な状態であります、併し乍ら靜かに其の原因を研究して見ますれば、多少の不足を云ふべき引つかゝりは有る様であります。

例へば日本出兵論(Head off of Japanese Army)は頻りに歐羅巴列國、亞米利加邊り迄も日本の兵を出して貰ひたいと云ふ事を言つて居ります、然るに之に對して帝國政府は出来ないから出さぬと云ふ事を頻りに辯明(Explanation)して居る、斯う云ふ譯で出来ない、あゝ云う譯で出来ないから出さぬ、と云ふ事をそれを辯明するだけ能く分つて居る人は成る程と思ひますけれども或は分つても其辯明を十分呑み込む事の出来ない人は我れが辯明をすればする程日本には何か考が別にある爲に兵を出さぬのである、此兵を歐羅巴に持出さぬど何れの處に出さんが爲に出さんのであらう。

聯合與國同盟國に對して同情が足らぬが爲に出さぬのであると云ふ事を、誤り(Mis-

(Linko) でありませしけれどもさう感ずる傾きが有ります、是等の事も我は此大使命、世界の平和を維持する事に付ては全幅の同情を持ちそれが爲には兵を出すなり其他何に於ても出来るだけの事は皆したのであると云ふ事を何故云はないか、私は不思議に思ふので有ります、出兵はちつとも拒むものでない。

併し乍ら第一輸送力 (Transportation Capacity) が第二には食料は歐羅巴の食料では日本の兵隊が堪へない、第三には百萬の兵を出すには少くとも二百億以上の軍用金 (Money for war expenses) を備へなければならぬのである、耻しい事であるけれども獨力では二百億圓は調へ悪し。

二百億が二十億でも六ヶ敷い、既に輸送力がない歐羅巴の食料では不適當である、二百億以上の軍用金を調達 (Raise) する事が出来ない以上は如何に出したくとも出さ

れぬのであるが、若し之に對して歐米政治家に於て適當なる方法があるならば致へて呉れ、我れは何時でもそれに應ずる事に吝ならぬと云うたならば、茲に於て苦情を云ふ代りに夫等の問題を研究するであらう、研究すれば結局日本から兵を出す事の六ヶ敷 (Difficult) 事に陥るかも知れませぬけれども結果は同じ事であつても彼等の猜疑心 (Suspicion) は其所に消滅 (Disappear) するでないか唯だ同じ事で有りますけれどもやり方の其當を得ざるが爲に、此方が大使其他の者を派出して辯明すればする程聯合與國の疑ひを招いてそれが爲にもつと親密であるべき與國間の親密も疎隔と言へば語弊 (Evils in speech) が有りますが、面白からぬ感情 (Sentiment) が事實に於て段々現はれて居る、例へば浦鹽斯徳の亂れんとする時に當つて英吉利でも佛蘭西でも軍艦 (Warship) を出す、一艘の船百人の兵隊 (Army) と今日歐羅巴に於ては極めて必

要なので有ります、其場合に於て必要のない日本に任せて置いて何等差支ない所の浦
鹽斯徳でも支那の楊子江にても日本に任せずして佛蘭西英吉利から艦を出して居ると
云ふ事はどうしても肝膽相照(Frankly)と云ふ状態が成立つて居らぬと見るより外に
仕方がないのでは有りませぬか、苟くも國際關係に於て肝膽相照すの條約が成立つて
居るならば萬里の向ふより艦を持つて來ると云ふ様な無駄(Duress)な事をせずして
東洋の局面はどうしても日本に依頼(Depend)しなければならぬのであるから、日本
に任せる其代り自分は近い所の大西洋其他の歐羅巴方面及亞米利加方面に向つて力を
盡すと云ふ事ではなければならぬ、聯合與國は多少なりとも此大戦局に力を致さなけれ
ばならぬのに、不幸にして其間に多少疑ひでも存して居るが如き事實が表面に現はれ
るので有ります、内部の事實は未だあるので有りまするが、それは寧ろ申さぬ方が宜

からうと思ひます、秘密(Secret)として居る事は秘密として保つ方が宜しいと思ひま
すが、私は現はれたる事に付ては多少の事實が其所に現はれてる事と思ふので有ります
す、斯う云ふ事は誠に慨嘆(Indignant)に堪へない次第で有りまするから、さう云ふ
事を根柢から一掃しなければならぬ、それに付て我々は怯めず臆せず(Fearlessly)我
れの主張として何れの方面に向つても耻かしからぬ事は大膽に言ふが宜いぢやない
か、向うの者が言つて居るに我れ一人遠慮(Leserve)して黙つて居る必要はない、向
うは永遠の平和手段として民族主義を提出する事となるならば門戸開放機會均等を主
張するならば、我も天理人道をもう少し履行せよ、天理人道に背いたる平和は永遠な
る能はずと云ふ事を何故躊躇(Hesitate)するのであるか、今日の如き局面が維持せら
れて居る以上は平和が一旦結ばれた時でも他日破れる事は識者を俟たずして明かであ

る、日本の人口が溢れて何處へも行けないうとしても水の低きに流れて行く如く流れ場所を開くは國としての義務である。

人類としての義務である、天はさう云ふ事をさせる爲に人類を造つたに違ひないのて有ります、是等の事を言へば少しも人を怒らせずして如何にも承認(Acknowledge)せしむべきに足る事柄で有ります。

それを遠慮して言はずに居ると我々の胸底に不平があればそれが他に於て一層悪しき状況となつて現はれまする故に、もつと親密なるべき關係も或は疎遠になる、言つて了つて本當に利害が了解が出来れば今日よりは却つて一層親密となる事が出来べき事柄と思ひます。

先づ是は東洋永遠の平和、世界永遠の平和を維持する手段として帝國の執るべき主

張すべき點を一端述べたので有りますが、更に近き支那問題(Chinese problem)に付ては尙更に知るべき點があらうと思ひます、此利害關係も非常に多いと思ひますが既に餘り多くの時間を費しました故に今日は遺憾乍ら其點は略して以上述べた所に付て諸君の冷靜にして愛國的御批判を願ひたいのである(拍手喝采)——於時局講究會——

○明日の婦人となれ(Be tomorrow's woman)

與謝野晶子

過去(Past)を偏重して何事にも過去の法則、制度、習慣(Rule, system, custom)を應用しようとする舊式(Old fashion)な婦人は次第に減して行きます、過去にも耐久性(Enduring character)を備へた好いものが豊富(Affluent)にあつて我々の生活の餘行

となる事は云ふまでも有りませんが過去を偏重する婦人は迷信(Superstition)の徒であつて選擇の能力(Capacity of election)を持つてゐないのですから其等の婦人の難有がる過去は害こそあつても益はないものであると斷言(Assert)して宜しいてせう、老婦人の間には猶さう云ふ時代遅れの考を持つた者が少しばかり殘存して居る様ですけれども併し其人達は實社會(Real society)の上に最早何程の權威(Dignity)をも示さなくなりました。

此事の喜ぶべき代りに現實(Reality)を偏重する傾向(Inclination)が一般の婦人に浸染(Soak)しつゝある事に對して私は寒心(Shudder)せず居られません、過去の繁縛(Fie)を脱したのは宜しいが更に現實のために囚はれるに到つては環境の奴隷(Slave of surroundings)となつて自己を萎縮(Shrink)させるものだと思ひます。

此惡傾向(Bad inclination)は一寸注意して見れば誰の目にも映ります今日婦人が現實に最上の權威を許さない者が何處にあるてせう、どの女も皆目の先の苦樂利害(Pain or calm & intellect or injury beyond nose)ばかりを考へて動いて居ります、過去の權威には盲從(Obey blindly)しませんが現實に盲從して居ります。

試みに高等女學校卒業(Graduate of high female school)程度の現代教育(Present education)を受けた婦人に對してその偽らない告白を引出す事が出来たらどの婦人も識者が見て「精神的(Spiritual)である」と評價するに足る丈の欲望を確かに持つてゐない事が明白になると同時にどの婦人も現實の物質文明(Substantial civilization)を其儘に肯定して、それに追隨し得るか否かを生活の中樞問題(Most important problem)として居ることが明白になるてせう具體的(Concrete)に云へばその婦人が未

婚者 (Bachelor) であれば、どんなに現代の若い女らしく一身を裝飾 (Decorate) しようかと云ふ程度の欲望に全力を集めて居ります、従つて其の欲望を満たし得る丈の財力 (Property) の保障ある男子を良人 (Husband) とする事を結婚 (Marriage) の重要條件として居ります、富家に育つた若い女は持參金 (Dowry) 附の好餌を以て男の物質欲を誘ひ、その男を良人として後も自分の持參金の保障の中に——現代の物質生活に追隨して行かれる丈の保障の中に——住まうとして居ります、之は婦人自身が現實の物質的勢力 (Substantial Influence) に屈服するのみならずその良人をも併せて物質的勢力に屈服せしめるものぞと思ひます。

之は固より我國の女子教育の根本精神 (Fundamental spirit) が間違つて居るからても有ります、良妻賢母主義の教育はその名を聞くと立派 (Fine) ですが、その良妻賢

母の實質はどんなものかと云へば結婚の基礎 (Basis) であるべき戀愛 (Love) を全く排斥して顧りみない物質的結婚に由つて妻と呼ばれ唯だ良人たる男子に隷屬 (Slave) してその性慾に奉仕する妾婦 (Concubine) となり併せてその衣食住の日用を便する臺所婦人 (Kitchen-woman) を兼ねる事が謂ゆる我國の良妻 (Good wife) であり妻が子を生んで纒かにその子の乳母 (A wet-nurse) たり保姆 (Nurse) たる丈の役目を果す事が謂ゆる我國の賢母 (Wise mother) であるとして教育されて居るのです、如此きは良人に對しても我子に對しても物質的に奉仕する婦人たるに止まつて居て精神的の妻でもなければ精神的の母でも有りません、かう云ふ婦人が果して眞實の意味の賢母良妻と云はれるてせうか、若し我國の女子教育が良妻賢母主義を徹底しようとするなら、私達に何よりも先づ自由平等の思想 (Ideas of free & equality) を教へて男子に

寄生し、子に屈服する不自然な關係 (Unnatural relation) から婦人の獨立 (Independent) することを激勵 (Encourage) せねばならない筈です。又戀愛を排斥するどころか、反對に良人と眞の精神的結合を遂げる爲併せて我子を眞に教育する爲に最も大切な愛情の深化 (Assimilation) と訓練 (Discipline) とを私達に激勵せねばならない筈です。また個人として良人と協同生活 (Joint-living) の伴侶として社會人類の一人として自己を獨立させ且つ他人を理解し得るために男子と同等の教育を私達に施さねばならない筈です。然るに家庭教育 (Home education) に於ても、學校教育 (School education) に於ても、私達は其等の事を少しも顧慮しない低級な教育に由つて私達の生命の發育 (Growth) を阻止されて居ります。かう云ふ教育は婦人を人格 (Personality) 視せずして物質視し男子の遊樂 (Amusement) の道具、人類生殖の器械 (Organ of human

rites) として専らそれに適當する様に婦人をして例へば食用獸 (Feeding animal) の如くに養成して居るとしか思はれません。

家庭と學校との教育が右の様に高尚な愛情 (Noble affection) を除外し博大な知識 (Erudite-wisdom) を拒否し、婦人の獨立を厭抑 (Oppress) して居るのでから、其他に處女會 (Virgin association) 婦人會 (Woman association) と云ふ様な婦人團體が一萬八千もあり、百萬の團體員を包容して居るにしても其等を指揮 (Command) するものは同じく良妻賢母主義や軍國主義 (Militarism) を喜ぶ男子であつて彼等男子は家庭と學校との壓迫 (Pressure) を以て猶足らずとし、其れ以上の物質的教育を有らゆる種類の婦人に強制 (Force) して男子の手足たらしめるのに都合の好い現代的な新奴隸 (Newslave) を養成しようとするのです。トルストイが「奴隸制度と言ふ言葉だけは

廢棄 (Reject) されたが、その惡弊 (Vicious habits) は残つて居る」と云つた事が現代の日本婦人の上に最も痛切に響くのを私は感じます。

未婚婦人が現實的、物質的であるばかりで無く、既婚婦人 (Married woman) もまた同じく此の惡傾向に囚はれて居ります、若い未婚婦人の間にはまだ少數の夢想家 (Dreamer) や理想家 (Idealist) があつて低級であり幼稚であるにしても精神的な慾望を未來に持つて居るのですが、既婚婦人に到つては殆ど皆現想のない日送りをして、眼前の物質生活を追隨し享樂する事に没頭し、若くは眼前の物質生活の不満足 (Disscontent) に煩惱 (Annoyance) を燃やし續けて居ると云つても過言 (Exaggeration) となしてせう。

男子は最も惡性な男子と云つても偶々事に觸れて自分を正視しながら羞恥 (Dishonour) 男子は最も惡性な男子と云つても偶々事に觸れて自分を正視しながら羞恥 (Dishonour)

的 (Confession) と懺悔 (Conversion) との間に、自分の生活を人類最高の目的の方へ一歩でも近づけようとする聰明な自省 (Self respect) の瞬間が屢あると云ひます、それは直ぐに忘却の淵に消え去る泡沫 (Foam) の瞬間 (Minutes) であるにしてもなきに勝ると云はねばなりません、私は疑ひます、各地の婦人の中で代表的な奥様 (Representative wife) だと云つて現に尊敬されて居る婦人達に果してさう云ふ尊い自省の瞬間が屢あるてせうか否、假りに一度でもあるてせうか恐らく其人達は「現代の思想に於て何が人類最高の目的であるか」と云ふ事すらも知らない。且つ考へても見ない奥様達ではないかと思ひます。

其等の既婚婦人の中で宗教團體 (Religious group) に屬して居る婦人達は外目には物質的勢力の旺盛な現實の世界に屈服しない精神的婦人であるかの如き觀を與へます

が彼等こそ半ば過去を迷信し、半ば現實に盲従する最も見苦しき氣の毒 (Sorrowful) な婦人達であるのです、例へば基督教婦人 (Christian woman) て云へば彼等は過去の贅物 (Superduity) である教會 (Church) 内の習慣や神學の傳統を離れて直ちに自己の心の内にある基督の聲に聽かうとする眞剣な且つ自由な態度を收らうとしません、彼等はトルストイの様にパウロ以前の原始的基督教に還る事も出来なければユニテリアンの様に聖書 (Bible) を自力で解釋する自由主義的、民主主義的な信仰 (Faith) に就く事も出来ない婦人達であつてその迷信的である事は阿彌陀如來の繪像 (Pictures) の前に涙を流す佛教婦人と大差を認め難いのです、此の様に一方には、過去の宗教に盲從の態度を收り乍らまた一方には現代の物質主義に降參 (Surrender) して私達が精神的婦人であるかの如き期待を全く裏切つて居ります、例へば彼等は彼等が異端視する

他の無宗教の婦人の如くに戀愛の成立がなくて容易に結婚します、その最も露骨な最近の例は救世軍 (Salvation Army) の山室氏が再婚の理由を自叙された「志を述べ」の一文には一語も新夫人との戀愛に及んで居りませんかう云ふ男女道德 (Sexual morality) を解しない無耻な男子に嫁する基督教婦人のある事を私は遺憾 (Regretful) に思ひます、基督教婦人である丈けにその矛盾 (Contradiction) が餘計に見苦しく目に附きます、賣笑婦 (Harlot) や賣笑婦を庇護する者を平生口ぎたなく攻撃する基督教婦人が彼等の機關雜誌 (Organic magazine) に於て、一種の賣笑行爲である一人の基督教婦人の無戀愛結婚に就て今日まで一語も言ひ及ばないのは如何に彼等の信仰が非精神的であつて彼等同教徒の間にある物質的勢力の前に如何にその信仰が無力であるかを示して居ると思ひます。

また既婚婦人の中で種々の公共團體 (Public group) に屬して貧民の救濟赤十字社の事業、教育、衛生其他の社會事業に奔走する人達があります、之は確かに過去になつた婦人の活動 (Activity) であつて現代に發生した事象の中の好ましい事象であるのですが、その好ましいと云ふのは其れが未來に亘つて價値を失はない立派な理想——人類最高の目的——の方へ針路を向けた事象であるからこそ云はれるのだと思ひます、然るに其等の婦人達は、第一に人類最高の目的が何であるかを知らないのですから、自分達の行爲 (Deeds) が果して如何なる目的に合して居るか否かを批判する能力 (Capacity to criticize) のないのは云ふまでも有りません人類社會に對する己むに己まれの愛が動因 (Factor) になつて自發的に其等の公共事業に努力するのはなくて、或婦人は唯だ動きたい爲に動き、或婦人は唯だ虚名 (Vacant name) 欲の爲めに動き

或婦人は團體心理に雷同するために動て居るので要するに唯だ盲動して居るのです、自己の行爲に確かな目的と明晰な批判とを自覺しないで行動するのは器械 (Machine) の如く動くのです (Patriotic female association) 人間の物質化、器械化です、此の事は愛國婦人會だとか婦人衛生會 (Female sanitary association) とか云ふ團體に屬する多數の婦人達の間から學問倫理 (Science & ethics) の基礎を持つた其等の事業の解説を私達に示す精神的の婦人が今日まで一人も現はれずに居るので證明する事が出来ると思ひます。

愛國婦人會の如きに屬する婦人達は國家が他の國民に向つて開戦する様な場合に——も二もなく其れに服從して戦時の御用婦人を勤める事を以て無上の榮譽 (Honour) として居ります、彼等は戦争が法外な暴力 (Abnormal violence) であり大袈裟な殺人行

爲 (Great murdering behaviour) であることに就ては何等の反省も收らず、何等の苦悶をも感じないので、彼等は正非の見さかひも無しに直ちに現實を謳歌してしまひます、戦争は現時の國際關係 (National relation)、經濟關係 (Economic relation)、倫理關係 (Ethical relation) に由つてまだ姑く避け難いものであるかも知れませんがそれにしても婦人は人類の半數を占めて居る、協同組合員として出来るだけ之を避ける事を男子に要求する權利 (Right) を持つて居るのですからその權利を適當に行使する事は婦人が世界人類の爲め國家のため、自己のために捧ぐべき立派な義務 (Duty) であると思ひます、たとひ、戦争の御用婦人を勤めるにしても少くも戦争の眞因と目的とぐらゐは正しく知つて置くべき筈ですが愛國婦人會の人達は戦争が突發すれば唯だ軍人 (Military officers) の指圖のまゝに戦争を後援し敵國の人間と云へば何の理由

も附せず、唯だ虎狼の如く苛酷に憎惡 (Hate cruelty) してしまひます、之は日露戦争 (Russo-Japanese war) の際の彼等の言動が實例を示して居ります。

矯風運動 (Movement of custom-recitation) や慈善運動 (Charitable movement) をする基督教婦人の間には演説や文章 (Eloquution or composition) に由つてその主張を發表する健氣な人達があります、私はその勇氣と熱心 (Vigour & earnest) とを尊敬する者ですけれどもその議論の感情的 (Sensational) であつて合理的 (Reasonable) でなく、物質的であつて精神的でないのに對しては遺憾乍らその尊敬を減ぜずには居られません、彼等は唯だ眼の先だけを見て居るのですから遊廓を廢止さへすれば娼婦の行爲は絶えると思ひ、同志の會員を多く殖やしたり、義捐金 (Subscription) を多く集めたりさへすれば矯風や慈善の目的は遂行されると思ひ女子大學の數を増しさへす

れば教育は進歩すると思ひ込んで居ります、彼等は戀愛と男女同權 (Sexual equality) の思想とを基礎とする男女道徳が新しく起らない爲めと社會に於ける富の分配の不公平 (Unfair distribution of wealth) である爲めとに由つて娼婦の發生を餘儀 (Flowers & leaves of poisonous grass) なくして居る事を問題の外に置いて唯だ娼婦と云ふ毒草の花や葉だけを摘み收れば毒草の根絶が出来る様に思つて居るのです、かう云ふ淺薄な考察 (Superficial observation) は物質的の考察と云ふべきものです、彼等と同じ程度に若くは其れ以下に無知無理想である婦人の會員がどんなに多數に加つても何の精神的な實力 (Real power) をも生ずるものでなく唯だ物質の寄與に由つて大きな無用の建物の會堂や學校が出来たり物質を以て貧民の一時の急を救つて永久の怠惰 (Final laziness) を買つたりする丈の事に止まります、又基督教主義と文部省の良妻賢

母主義とを曖昧に妥協 (Obscure compromise) させた淺薄な教育は、嚴格に云へば教育の精神を失つたものです、其れに女子大學の美名を借して附けたものが現はれるにしても私達には唯物質的な大きな校舎が眼に映ずる丈けにすぎなからうと思ひます。(之は新渡戸博士の監督の下に安井哲子女史達の基督教婦人會が近く開かれると云ふ新しい女子大學に對する私の不安を述べて置くのです)

多少とも精神的である様に期待される境遇にある以上の婦人でさへ、その實際の生活に正視すると右の様に沒精神的であるのですから、まして未婚と既婚を問はず一般の婦人が物質主義者として現實に屈服して居る事は常に目に餘る事實です、彼等が衣服、化粧品 (Cosmetics, toilet set) 其他の身の廻りの粧飾品に就て如何に年毎に過度な奢侈 (Luxury) を増しつゝあるかを觀れば此事は容易に證明されます、私は固より禁欲

主義にも過度の制欲主義にも反対すると共に、或種の奢侈に對しては寧ろ正當の理由を以て或程度までを承認する者ですが親、兄弟 (Parents brothers) 良人等の男子に寄生して居る婦人が過度に身分不相應な物質生活のために男子の財力を浪費する事に對してはその無智と不道德とを憤らずに居られません。

中流以上の婦人の外出するのを見ると盛装 (Full-dress) と言ふべき程度に達しない場合でも二百圓内外の價格 (Price) の物を身に着けて裝飾して居ります、盛装に至つては一本の帯に千金を費して居る婦人さへ有ります、結婚に要する衣裳其他の費用は今日その普通なものでも一千圓を下らず少しく派手にすれば三四千圓を要し、その以上は萬金を超えて停止する所を知らません、其等の大金は悉く父兄や良人たる男子が負擔 (Oblige) して居るのです、一錢と雖ども婦人自身の勞動から得られたものでは

ないので、私は途上や電車 (Electric car) の中で美装して居る婦人を見乍ら、怠惰にして無知無能な多數の婦人がその物質的の奢侈を以て如何に極端 (Lazily) に男子の財力を偷みつゝあるかを考へて羞耻と腹立たしさとを感じる事が屢々有ります。

此度九州に於ける製鐵所、鐵道院、鑛務所等の官吏の收賄 (Taking bribe) 問題に於ても私は官界の男子が彼等の接近する商工業界 (Commercial & Industrial Circle) の黄金萬能主義 (Mammonism) の惡風に感染した結果であると思ふ以外に彼等の家族である妻女の物質的奢侈の欲望が彼等男子の良心を隠然と鈍らせて大それた收賄の罪惡を犯さしめて居る他の半面のあることを想像せずに居られません、謂ゆる良妻賢母主義の教育が實際生活に無効であることは此の一事でも解ります。

女學校で制欲的な質素儉約 (Frugality) を極端に教へられ妻の内助と云ふ事を教へ

られた婦人が妻となり母となつて後の物質的奢侈は教育の豫期と反對の結果を示して居ります、若し内助の實力があるものなら其等の妻女が良人の不正な金銭の收得を豫防 (Precaution) し警戒 (Warning) し苦諫 (Advice) せずに置かない筈ですが一般家庭の婦人に其れだけの實力を備へて常に良人の忠實聰明な伴侶 (Faithful & wise companion) となつて居る、尊敬すべき妻女が幾人あるてせうか今日の日本では男も女も口では黄金萬能の現實主義を排斥して居る様ですが言行の正直 (Honest) な一致を喜ばない習慣の中に腐敗して居る國民の實際生活は悉く眼前の物質的欲望に向つて照準されて居ります、中にも男子に比べて教育程度の低い婦人が最も露骨に物質欲の奴隷であることは怪むに足りません。

私はこの現實偏重の傾向を怖ろしいことに思ひます、之は確かに日本婦人の生活意

志の眞面目 (Serious) てなすことと弛緩 (Dullness) とを證明して居るのです、此の結果は婦人自身の頹廢に止まらずして良人を毒し一家を殊に開戦以來は最も緊張した生活を実現することに一生懸命 (Desperately) になつて居ります、歐米の婦人にも短所はありますが飽までも現實を尊重しながら現實に盲従しないで明白に役立つ何等かの理想を以て現實を統御 (Control) し改造し批判し鑑賞して行く生活——靈と肉 (Soul & flesh) と精神と物質 (Spirit & substance) との融和した一如の生活——を求めて止まない、彼等を見るとその生活意志の摯實と熱烈とを尊敬せずに居られません、彼等は今日に生きると共に併せて明日 (Tomorrow) に生きる準備 (Preparation) のある婦人です、否既に今日に於て明日を生きて居る婦人です、何となれば彼等は明日の生活状態を方向舵 (Directed rudder) として今日の生活を間断なく推進して居るので

すから私達日本婦人が遅れ馳せながら自決すべき生活の轉回を實に此の態度を採る外は無いと思ひます。

幼稚な言ひかた (Infant phraseology) ながら、婦人に必要な事は先づ智慧の眼を開いて現實を批判しようと心掛けることです、之に因つて現實に盲従することから消極的 (Negative) に逃れることが出来ず、現實の生活が間違つて居ないか、根本と枝葉とが轉倒しては居ないかと云ふ疑惑 (Suspicion) が生じます、もう現實に雷同しなくなり、どう云う生活を選択したら悔と無駄 (Regret & useless) との尠い自分に適した、満足な人生を建造せられるであらうかと云ふ向上の慾望と煩悶とが生じます、かう云ふ疑惑や煩悶を持つに到れば人の内にある獸性 (Animal character) に代つて神性 (Holy character) と云ふべき優良な人間性が頭を擧げ人の生活が物質的から精

神的へ一歩踏み込んだ境地だと思ひます、黄金 (Gold) 其他の物質が最早これまで程の威力 (Authority) を加へ得ない境地です、今後の婦人は是非ともこの疑惑や煩悶を實感する必要 (Necessity) があります、今日までの婦人にも疑惑や煩悶はありますがそれは反對に如何にしたら現實の物質生活に屈服し妥協して生きて行く事が出来るかと云ふ盲動の爲めの疑惑や煩悶にすぎないものであると思ひます。

さて現實の價値を批判し選擇するには確かな標準 (Standard) が必要になります、この標準が理想です理想とは現實の生活を明日まで進化 (Evolution) させるための方針ですが動物には明日の生活をより美しくしようとする慾望がなく従つて生活に豫定の方針を持ちません、之が人間と動物との異なる所て人間にして理想のない生活をする者の動物的であると云はれる所以です、現代の文明はその物質生活に屈服して盲動

する大勢 (Orrantry) から言へばトルストイが「すべての誇張せられたる十九世紀 (Nineteenth century) の文明なるものは要するに我等が舵もなく行方も知らずして漂 (Floating) うを意味す」と言つた通りに正當な生活の方針即ち理想を缺いたものであると思ひます之は男子も婦人もその内心に問へば明白なる事實です、唯だ男子は資本と勞働 (Capital & Labour) とに由つて得たる資財を以て物質生活を營み、女子はその男子の資財を盗用し濫費 (Waste) して物質生活を營んで居るにすぎません之がために物質生活は非常な勢力 (Extraordinary influence) で進歩して行きますが反對に精神生活は萎縮して人は愛を失ひ自由獨立の氣風 (Disposition of freedom & independens) を缺き學問倫理の權威が衰へ利己主義 (Egoism) 依頼主義 (Dependantism) 黄金萬能主義 (Mammonism) 權力主義 (Authoritism) 等が跋扈 (Prevail) します、婦人がますます

實笑婦にひとしい心術を示し奢侈な粧飾を競ふのも原因は此れに有ります
教育が既に物質的良妻賢母主義を採つて居る以上婦人は未來の生活理想 (Future living idea) が何であるかを今日の學校と家庭とに由つて學ぶ事が出来ません、此に於て私達は之が爲めに自ら教育する努力 (Indevour) が必要になります、さうして自分の生活理想を自ら選擇して確かに所有し現實生活をこの標準に従つて調節 (Adjust) し改造することに眞剣にならねばなりません。
私は生活の理想を下の如くに考へて居ります世界人類全體が愛 (Love) 理性 (Reason) 平等 (Equality) 自由 (Freedom) 勞働 (Labour) 享樂 (Amusement) 進歩 (Progress) 是等の中に生活する事であるとは是等の一々に就て述べる事は紙數の許さな所ですから略しますが人間が最も完全な生活を望む以上その極致はこれ廣大無邊 (Vast)

to expanse) を理想に達せねば已みません。

之は世界同胞主義 (International brotherhood) または世界人道主義を以て呼べるべき理想です、私慾と私慾の排擠 (International humanism) や妥協に行詰つて居る現實生活の狭い局面に比べると之は茫漠として空想の様にも夢の様にも感ぜられます、けれども人生は宇宙と共に無限悠久 (Infenuite eternal) です、我達は現實の生活を物慾の争奪に終始させて草木 (Plant) の如く意義 (Meaning) も無く短命のまゝ朽ちて行く事の寂しさに堪へません、我達は此の理想に由つて私達の現實生活を無限悠久の事業に参加させる事が出来るのです、出来るだけ擴大してそれ以上のものもこれ以上のものも無いと云ふ偉大な生活 (Grand life) の中に私達を活かす事が出来るのです、現實主義の爲めに物質の奴隷となつた我達は此の理想主義の生活に由つて今日より明

日へ自由の人として自ら解き放ち (Emaniculate) ます。

此の悠久の理想へ實際の生活を照準して出来るだけ多く進めて行く事が私達の生活です、私達は一躍 (At a bound) して此の理想が實現されると思ふ様な狂氣じみた幻想 (Lunatic fancy) を持ちませんが、常に此の理想を終極に豫想しながら實際問題としては、我等の現在到達し得べき最善 (Best) のものは何であるかと批判し選擇し乍らその手近い最善のものゝ實現に努力 (Exert) する外はないのです、リッブスが「我等は自己の素質と世界に於ける我等の位地とに由つて最も實現するに適する目的 (Purpose) に其力を集中する義務を持つて居るすべての人は同一では無い、故に個人 (Individual) がそれ〴〵の地位に於て社會全體の中に織込まれ、それ〴〵に分業を以て全體の文化的使命 (Enlighten mission) に貢献する」と云ひ、また「すべての人は、そ

の特殊なる天性と能力 (Special nature & capacity) とに従つて、その力の及ぶ限りの利と善とを此世界に造り出さなければならぬ」と云つたのは此意味だと思ひます、かうして根本の生活方針が定まつて見れば實際問題に於て批判と選擇 (Selection) が容易に行はれて疑惑と煩悶とに心力を浪費する事が尠くなり、物質生活は精神生活の機關であると云ふことが分明して益々その物質生活を有益 (Profitable) に利用しながら人は常に物質の主人 (Master) たる位地を守らうとするに到ります。

結婚にしてもこの理想の中に住む婦人は在來の様な性交及び臺川用の奉仕 (Service) を以て男子に寄生する物質結婚を陋とし、この理想の一致の中に夫婦 (Couple) としての愛の共鳴を確認した精神的結婚 (Spiritual marriage) を要求せずに置かないでせう、トルストイが「結婚は男女双方の人生に對する目的の一致したる時に於てのみ

幸福 (Happiness) を齎すべし」と云ひまた「結婚せんとする者に告ぐ、君達は從來よりも更に深く思索して現に生活しつゝある目的の何處にあるやを明確ならしめざる可からず」と云ひ、また「君達の一生の目的は結婚の喜びにあらずして君達の一生に由つて世界により多く愛と真理 (Truth) とを招致することならざる可からず」と云つたことは斯くして事實となつて行つてせう。

婦人の高等教育 (Higher education) 職業開放 (Free of occupation) 參政權 (Suffrage) 等の問題にしてもこの理想を標準として批判すれば明かにその正當であることの解決 (Conclusion) が附いて唯だ如何にして之を實行するかと云ふ事實問題が残るだけになり、ます中にも教育と職業との自由を男子と平等に婦人が均霑されることは急務 (Urgent measures) だと思ひます、教育を高めずして婦人の感情と理性とを陶冶する事は出

来ません、婦人の愛が理性の協力を缺き、婦人の理性が低級であれば男女の平等な進
化は期待されない事になるてせう、婦人が自勞自活 (Self work & self-support) の道
を塞がれて居る以上、爾の額の汗に由りて爾の麵包 (Bread) を得べし」と云ふ勞働の
平等と自由は婦人に得られないことになり、それがために婦人はいつまでも現在の寄
生状態 (Dependent state) から脱せられずして、已むを得ず男子に屈從して非人格的
結婚 (Unpersonal wedding) に甘んずる様になるてせう。

今や我國は自發的にか或は聯合國 (Alliances) の徳憲に由つてか兎に角西部利亞へ
出兵する準備が出来て居ると云ふ事です、かやうな問題に對してこれまでの婦人は何
の考察もせず、唯だ男子の一存に任せて居るのが習慣となつて居ましたが、併し人類
の半數を占めて居る婦人が人類の理想生活に参加して、平等にその苦樂を負擔しよう

とする、自覺 (Consciousness) を持つ上からは如何なる社會國家の問題に對しても意
見を述べる権利があります、前に申した通り戦争は國家の凶事 (Unlucky affair) であ
ると共に家庭の凶事です、國民の榮辱問題であると共に私達の良人、兄弟、子孫 (De
scendant) の生命に關する問題であり、やがて私達婦人の消長に關する問題です、たとへ
昔からの蠻氣 (Barbarous heart) を失はずに居る好戰的な男子 (War-likemen) が一
齊に出兵を歓迎するにしても婦人は人間生活の理想に照して大膽 (Boldly) に思索批
判して、言ふべきだけのことを言ふ必要がある事と信じます、それを公衆 (Public)
の前に發言しないまでも家庭の男子に對して述べるだけの熱心と勇氣とがあつて欲し
すと思ひます、出兵 (Send army) の有無に關らず我國の經濟状態 (Economic con-
dition) は早晚世界的影響を受けて破天荒な困難に陥るてせう、之は私の直覺 (Intuition)

on) から云ふばかりで無く、福田徳三博士の様な専門家 (Specialist) の頻りに警告せられる所です、かう云ふ切迫した實際問題から考へても日本婦人はその眼前の物質偏重主義から、目を覺して高遠正大な理想の指示する方へその生活を緊張させなければならぬと思ひます、手近き方法の一つとしては、消極的には無用の奢侈を廢すると共に日常の必需品 (Necessaries) を出来るだけ廉價に購入 (To pur chase cheaply) する工夫を廻らし、相互の體質の強健 (Strength of body) を計るために衣服や家庭よりも食物に財力を多く用ひ、贅澤費の代りに婦人自身を初め家族、小兒の教育費を支出し、積極的 (Active) には何等かの心的または體的の労働を以て經濟的收穫 (Economic harvest) を計り、如何なる婦人も男子の保護 (Protection) に由らずして自活することを原則 (Principle) とする習慣を作ることであると思ひます。

特にその後の方のことは早くから多數の農業婦人 (Femal farmer) や工場婦人 (Female workman) が實行して居る所であり、また次第に増加する女教師 (Female teacher) その他の職業婦人が實行しつつあるところですが、自分の労働の成果 (Fruit) である金銭で一冊の書や一掛の襟 (Collar) ても買ふことは、男子の金銭を消費して居た時代に比べてどんなにか氣安く (Easey) 且つ愉快 (Pleasant) であるか知れませんが、私もこの十餘年來少しく持つて居る自分の労働の實際から此事を裏書 (Firmness) したいと思ひます、多くの家族の生活費を戸主たる男子一人の勞銀で支持して居る一般の家庭を見るに、私は其等の男子の負擔の餘りに過大 (Too much) なのを氣の毒に思はずに居られません、婦人が私の云ふ明白の生活理想に生きようとするなら第一に男子のこの負擔を輕減 (Alleviate) するためにも獨立の精神を振ひ起すことが急務である

と思ひます。

○我が歩むべき道 (My road to walk)

早稲田大學教授 武田豊四郎

「死 (Death) は人に從ふ事影 (Shadow) の如く、人に迫る事怨敵 (Enemy) の如し」と印度の古哲闍伊那阿闍梨 (Jainacharya) が言うてゐる如く、人生は時に鞭 (Whip) たるれつゝ死の暗し關門 (Dark Gate) へと急ぐ短し旅路 (Journey) である。抑々造物者 (Creator) は何事を爲らしめやうとて吾等に五十年の時を貸し與へたのであらうか。

八九歳の時に最も親愛 (Intimate) せし友 (Friends) と死別して生命の不可思議

(Wonderful of life) に驚き、其後他國に流偶して夙に人生の寂寥 (Loneliness) を意識した予は十七八歳の頃から「人間の正體 (Original of human being) は何てあらうか」「生存の究竟目的 (Final object of life) は那邊に存するか」といふ至難の問題 (Difficult subject) に没頭する様になつた、しかし聖經の因襲的解釋を事とする外何等眞摯の求道心なき現代の僧侶牧師 (Priest, & Missioner) は、わが爲に救濟の門戸を開いて呉れなかつたのである、予は勢人生の目的に迷ふ靈界の放浪者 (Wanderer) たるを得なかつた。

顧みれば二千六百年の往昔大聖釋尊も靈界の一迷者として大雪山麓に苦い經驗 (Experience) を嘗められ、二千年前神子基督も四十日四十夜の間飲食を斷つてヨルダンの谷に懊惱 (Annoy) せられた、しかし釋尊も基督も「求むる者は必ず得る」といふ得

道の實證を躬親ら示されてゐる、予は之等古聖の傳記 (Biography of ancient moralist) を耽讀する事によつて大いに慰安 (Comfort) を得、假令我身は古聖の後塵を拜するにとすら出来なくも下根劣機の凡夫たりとも求むる一念にあらば何時かは人生問題を解決し得るとの信念を得た。

爾來靈界放浪の生活を送る事茲に二十年に及んだか求道心が微弱であつた故か、今以て究竟的安住 (Final peace) の心境に到り得なす。

さり乍ら二十年間人生問題探求の道程を續け來れることによつて、臙けながらも人生の目的を認め得たことを神に謝せねばならぬ。

多くの我が友は名利榮達 (Fame & wealth) の影を追うて躓き、或は耽美享樂の毒に滅ぼされた。彼の惡魔セータンは釋迦基督の如き大聖をすら破滅の淵 (Deep pool of

ruin) に陥れ様とした程強盛であるから凡夫がその毒手から免れることの不可能 (Impossible) なのは當然である、酒匂博士、押川長官の明智を以てしても猶其誘惑 (Temptation) を退ける事が出来なかつた、これ等は人生の眞目的を知らざるより起つた悲劇 (Tragedy) である。

少年青年の時代には空想 (Imagination) に憧れて盲目的に進むことも止むを得ないであらうが苟しくも三十歳以上に達して相應な思索力 (Thought) や經驗を有する様になつた人々は須らく眞面目に人生究竟の目的と之に到達する方法とを熟慮せねばならぬ。しかし人間は自惚 (Self-conceit) の強き動物であるから輒もすれば自己の小主觀を偏重して敬虔の態度 (Prudent attitude) を失ひ易いものである、枝から林檎 (Apple) の落たる現象は古來千萬の人々によつて目撃せられたが、ニュートンのみ初めて萬有引

力 (Universe attraction) の大法を感得する事が出来た。「松は吹く説法度生の聲柳は染
ひる觀音微妙の姿」と古人が言うた通り、風の音や柳の色も最高真理 (Highest truth)
を吾々に暗説してゐるのであらうか、吾人は林檎の落下を見て何等の注意を惹き起さ
なかつた古の愚人以上に無智である、されば吾人自らが先人未發の大道を新に發見
し様など、企てるのは餘りに越權 (Over-control) である、人生の意義目的及び之に到
達する方法を考慮するに當つても吾人に百千萬倍する苦心を以て此問題の解決に身命
を捧げた古の聖者の言説を謙讓な心 (Humble heart) を以て味はねばならぬ、予は斯
かる立場からしてバイブルや佛典や哲學書を嬰兒が母乳を吸ふ様な心持で耽讀した。
「犢子は幾千となき牝牛の群の中にもその母牛を識別す」と印度の古諺 (Ancient
proverb) にあるが如く、我が愛讀した聖典の中でもわれに靈乳を與へて呉れる真理の

女神たるべきものは熱帯印度の聖林 (Sacred forest) に出現したウバニシャツド文學で
あることを確信し得た時求道の靈火がわが瘠せ衰へた胸の中に燃え初めた。
「世にウバニシャツドほど人心を高擧せしむるものはあらず實に此書は我生時の友た
るのみならず死後の慰安たるべし」と獨逸の大哲シヨールペンハウワーが告白している
が予も亦ウバニシャツド哲學 (Philosophy) によつて救はれた一人である然らばウバニ
シャツドは人生問題に關して如何なる真理を吾人に示してゐるであらうか、現實主義
なる支那民族 (Chinese tribes) は人生に於ける最深欲求として福祿壽財喜の五福を擧
げてゐるけれどもこれらは畢竟現世暫有の幸福 (Happy) に外ならぬウバニシャツド
の諸聖者は暫有の假樂を追はず遠水の眞樂を求めよと吾人に教を垂れてゐる、予が日
夕法弟と共に誦するチユハインドーギヤ (Bhagava) と呼ぶウバニシャツドに次

の様な聖句がある

アサトリー マー サドガマヤ

(願くはわれを無常より常住に到らしめよ)

タマソリー マー ジョーチルガマヤ

(願はくはわれを闇黒より光明に到らしめよ)

ムリチヨール マー アムリタムガマヤ

(願はくはわれを死より不死に到らしめよ)

二千六百有餘年前の此聖句は人類至深の欲求 (Request) を最も端的に道破してゐるではないか印度諸學の研究とウバニシヤツド教理の宣傳とに捧げる爲に昨年二月十日建立したる我一如洞に於ては右の聖句を欣求讚と名けて日常口に絶たないのである、

無常 (Uncertainty) と闇黒 (Darkness) と死と此三者は圍繞せられてゐる人生に於て我等は常住 (Calm) と光明 (Glory) と不滅 (Immortality) とに莊嚴せられてゐる眞實の世界——大我の世界——眞我の生活を顯すべき天職 (Natural mission) を課せられてゐるのである。

人は動物から進化し來つたのであるから、動物的本能 (Animal instinct) が強勢なのは止を得ない、しかし享樂耽美 (Addiction of joy & beauty) にのみ傾ける動物生活本能生活は決して讚美すべきものではない。

人間は動物中の靈長たる所以は本能を調働して理智生活 (Reasonable life) を營み得る所に存する併し理智生活と雖も決して人生究竟の生活ではない、尙これ以上に神の生活——眞我の生活がある。

人間に眞我の生活のある事を説いたのはウバニシャッドが最初(Beginning)である。ウバニシャッドには眞我の生活を欣求して苦辛した幾多の聖哲の美しい物語(Stories)がある、カータカ(Kathuka)と呼ぶウバニシャッドにはシヨイベンハウワーを感激せしめたナチケータス童子(Nachi-ketas)の求道の物語がある。

ナチケータスは其の父に呪はれて死神閻魔(Mito)の支配せる冥界の人となつた、童子は閻魔の宮殿(Palace)に到つたけれども死神は他行して三日間不在であつた、賓客(Guest)を優待せぬ事は古來印度人の罪惡(Crime)として忌む所である、我宮殿に歸り來つた死神は三日間何等の食物も與へられずに悄然としてゐるナチケータスを見た時三日間賓客を冷遇(ill-treat)した罪を購ふ爲に童子に三願を提出する事を許した。

再び人界に還つて父と和解(Compromise)したと云ふ第一の願望と、天宮に生れる秘法(Secret meals)たる聖火の神事を知りたいと云ふ第二の願望とは立所に許されたが靈魂(Soul)の真相を明にしたと云ふ第三の最深欲求(Deepest request)は願として許さなかつた、死神は之に代るべき願望として、長命美女財寶王權(Longevity, beautiful women, treasures, sovereignty)等の物質的快樂を提起せしめ様とした。

眞我の求道者は決して斯かる暫有の快樂に迷はされぬ釋迦も菩提樹下で斯かる惡魔の誘惑(Temptation)に打ち勝ち基督も亦セータンの試練に勝利を博した、轉じ難いナチケータスの求道心に感激した死神は「世に眞智(True wisdom)と無明程相異なる二物はあらず予は汝が眞智を欣求するの切なるを見たり、快樂の大軍も汝を敗る事を得ず」と讚美した後、眞我(True-self)に關する秘義を説き聞かせた。

現實界の假樂 (Prajasa) を追ふのは凡愚であり眞常界の妙藥 (Creyas) を求めるのは聖哲である。

前者は淪落の淵に陥り、後者は解脱の峯に登れるブリハダーイーニヤカ (Brihadaraṇyaka) と呼ぶウパニシャッドには、マリートレイイー夫人 (Maitreye) の眞摯なる人生目的探求の説話が記せられてある。

ヤーギヤワルキヤ大仙 (Yajurveda) にはマリートレイヤ及びカーチヤニー (Katyayani) と呼ぶ二夫人があつた、大仙が家居生活を終つて將に森林に隱遁しやうとして資財を分配した時、凡婦カーチヤニーはこれからの資財 (Robbed treasures) て安樂に晩年を終り得るのを衷心よるこんだ、然るに聰明なるマリートレイイーは森林に去らんとする良人 (Husband) の袂を控へて「敬愛する郎君に尋ね置くべき一事あり、

一切の富を含蔵せる大地が悉く我所有とならば之によりて不死不滅を購ひ得るや」と尋ねた、大仙が「假令全地 (The whole earth) を得るとも富者の生活をなし得んのみ、奚んぞ不滅の生に入ることを得んや」と答へた時夫人は「不滅を得るに寸益なき斯かる資財を何かせん願はくば不滅に到る道を顯示 (Display) し給へかし」と切に求めた。大仙は賢夫人 (Wise madam) に眞我の哲學を説いた後、森林生活をなすべく出家した。

古代印度には眞我を探求する學者王士女人が極めて多かつたから世界最高の思想 (Highest thought) を人文史上に残したのである。

彼等の高唱した眞我生活の内容 (Contents) を茲に説明する餘裕はないが一言に之を表はせば人は眞に生きさんが爲めに自我の實相を即ち神と不二なる眞我を觀知せざるべ

からずといふとに歸する。印度の聖訓にも「數千卷經の典(Crossies)に説ける所を予は半偈に約説せん梵(ほん)眞如(しんじよ)大我(たいが)眞我(しんが)神靈(しんれい)は眞常(しんじやう)なり、世は虛妄(Absurdity)なり人間の眞我(しんが)は梵(ほん)なり」とある、更に又「獲得に價するもの、享樂に價するもの、認識(Recognition)に價するもの、梵の外に之あることなし梵を知れる人は梵たればなり」と説いてゐる。

短(た)かき人生(じんせい)に於(お)て眞我(しんが)を捕捉(Capture)し得(う)るや否(いな)やは疑問(Question)である、より乍(また)予(よ)は求めざるべからざるが故(ゆゑ)に求めると得るとは敢(あ)て論(ろん)ずる所でない結果(けつこ)を打算(だつさん)して事(こと)をなすのは卑(ひ)しき商人根性(しやうじんこんじやう)である、我(わ)は永遠不滅(Eternal immortality)の大我(たいが)を心理(しんり)に包藏(ほうざう)してゐるのであるから若(わか)し現世(げんせい)で得(え)られないならば未來生活(Future life)に入(い)つてからの後(のち)を期(もち)すればよいと覺悟(かくご)

(Readiness)を定(さ)めて徐(じゆ)々に且(かつ)つ不(ふ)退轉(たいてん)に十有餘年(じゆうよねん)眞我(しんが)探求(たんきゆう)の道程(だうてい)を歩(あ)み續(つ)けてゐるのである、予(よ)は釋迦(しやくぢあ)や基督(きりすと)と異(こと)つて現生(げんせい)も來世(らいせい)も眞我(しんが)を欣求(きんきゆう)する永遠(えいゑん)の求道者(きうだうしや)たる宿命(しやくめい)に甘(あま)んぜねばならぬ。

「行(ゆ)けど行(ゆ)けど到(いた)らぬ空(Sky)を慕(たの)ひてもものぼるや人の心(こゝろ)なるらん」と故大西操山先生(こさいそうざんせんせい)の詠(よ)ぜられた和歌(Japanese song)は恰(あた)かもわが寂(さび)しき宿命(しやくめい)の宣告(せんごう)としてあるかの如(ごと)く我が耳(みみ)に響(ひび)く。

前に記(し)した欣求讚(きんきゆうさん)は永遠(えいゑん)の求道者(きうだうしや)たる予(よ)の吟誦(ぎんじゆ)するに相應(お)はしい歌(うた)であるがもう一つ予(よ)の日夕(ひじゆう)口ずさむ梵歌(ほんか)の拙訳(せつげつ)(Clumsy translation)を記(し)して筆(ふで)を擱(お)かう。

大我(たいが)を憶念(おくねん)(Memorise)せよ、大我(たいが)を憶念(おくねん)せよ憶念(おくねん)せよ大我(たいが)を……汝愚人(なんぢばか) (Stupid fellow)よ。

幼時は嬉戯(Sport)に耽り壯時は美女に溺れ老時は杞憂(Anxiety)に沈む。
何時か果して大霊を冥想せしや。

大我を憶念せよ大我を憶念せよ憶念せよ大我を……汝愚人よ。

不可解の辭 (The word uncomprehensible)

法學博士 蜷 川 新

一、偉人 (A Great man) 不可解の歎

昔し奈翁一世は「不可解」と云ふは世にある可らずと唱へて、此の文字の廢止 (Abolishment) を要求した、彼れが曠古の天才 (Unprecedented genius) を以てして此の言あるは尤も也と首肯せらるゝ所である、然かも彼れ英國 (England) を亡ぼさんと欲して

能はず、露國 (Russia) を歐洲より亞細亞に逐はんとして是れ亦能はず、彼れの志せる所畢竟不可能 (Impossible) にして、彼れ終にセントヘナ孤島 (Solitary island) に悶死 (Wounded death) するに至つた、彼れは定めし孤島の中に於て心の中に呟いたであらう、「我れ千古の偉才を懷き、事欲して常に意の如くならざるはなかつた、然るに英と露との征服 (Conquer) に至つては我意の如くならず、終に彼の凡將ウエリントンや又彼の俗物ブルヘルの爲めにウオーターローに敗れたるは全く不可能也」
千古の偉人にも不可能の感はある可し、況んや凡人 (Layman) をや、是れ余に不可解の感甚だ多き所以である、先づ國際間 (International) の事實より初めて不可解の感を列ね見れば左の如くである。

二、外國に於ける事實に就ての不可解

(一) 今の獨逸國民(Germans)が四十餘年前に於ける普佛戰爭の大勝利に心傲り、近來著しく暴戾(Violent)の行動を他國に對して行ひ、之れより列國の反感(Opposition)となり終に英佛露國の大國を敵(Enemy)となし然かも此等諸國に對して最後の大勝利を收め得可しと想像せし事などは、是れ「彼我を解し廟籌定まり」て後に動ける慎重(Prudent)の行動とは、他國人より見て受け取り難き所である、然るに獨逸人は或は「神の庇護(Gods protect)獨逸に在り」と云ひ或は「先づ佛國を亡ぼし得可し」と稱し勝利を公言したるに至つては蓋し不可解である、戒む可きは實に國民の驕慢(Han-ghiness)と外國實力(Real ability of foreign country)の不知(Unknown)ではなす乎。然るに此の驕慢なる獨逸に同情し、或は之れを敵作ら天ツ晴れ(Amirable)と賞揚して今に尙ほ敬服(Respect)するものあるに至つては益々不可解の感なき能はずは

なしか、獨逸に對白耳義、塞耳北亞乃至は羅馬尼の勝利は實力餘りに懸隔(Far apart)し問題にはならぬのである、大國たる露及伊に對する獨逸の勝利に對しても當然(Reasonable)と云ふのが適當である。

而して西歐に於る獨逸の軍況(Military view)は果して如何であるか、獨逸の大に優勢(Powerful)を示せしは、開戦後僅かに一ヶ月の間即ちコルヌ戰迄の間ではなかつた乎、其の以後に至つては、英佛軍の方に、常に勝利ありし事は争はれぬ事實である。獨逸を辯護(Vindicate)するものは或は之れを以て豫定の退却(Proposed retreat)となし、是れ英佛軍誘致の術策(Stragem to invite)也となした、乍併、是れ無用にして且つ當らざりし辯護である、斯る辯護を爲すの觀念(Concept)が抑も甚だ不可解ではなしか、英佛は我等の同盟國(Silience)である、一致共同(Join)して敵と戦ひつゝある

味方(Friend)である、之れを賞し之れを辯護するは、是れ味方の情誼(Affection)且つ正義(Justice)にして又外交策的主張としても當然の事である、然るに我國には英佛の進軍遅々(Slow march)たる嘲(Deride)る人は甚だ多くして、而して敵の退敗を辯護する人も亦多い、是れ甚だ不可解の事ではないか、我國に於ては、獨逸は敵兵を其の領土(Territory)に入れしめず是れ獨逸の優秀なる所以なりと稱して憚らざる人がある、然れども是れ事實を無視(Disregard)した議論(Argument)ではないか、獨逸は現に二百九十五萬平方キロメートル(七十四萬里)の領土を英佛の軍の爲めに占領(Occupy)せられて居る、此外にアルサスの一部も佛軍の爲に占領せられて居るのである、而して獨逸の敵國側より占領しつゝあるは唯だ單に歐洲(Europe)の中に於ける領土に過ぎざるにも拘らず、獨逸が敵の爲に占領せられつゝある領土は、歐洲亞弗利加亞

細亞及太平洋(Pacific ocean)に亘り實に全世界的である、此の事實(Real fact)あるにも拘らず獨逸は其の領土を敵國に占領せられずと賞讃し獨逸の勝利は七分也など云ふのは甚だ不可解の事ではないか。

人或は云ふ、獨逸は其の従來の領土を失はず殖民地(Colony)の占領せられたる如きは、其の價值(Value)に於て従來の領土を奪(Rob)はれたるに比す可らずと此の辯護も亦甚だ不可解である、此の論者の如きは、若し獨逸にしてアルサスローレー又即ち獨逸四十年來の新領土を佛軍の爲めに占領せらるゝとも是を以て獨逸の敗北(Defeat)を意味せずと云ふものであらう乎、又近來英より得たるヘリゴランドを英國に奪はるるとも獨逸の敗北にあらずと斷言(Assert)するのであらう乎。

抑も國家(Nation)の領土としては、其の新しきと舊きに依つて價值の定まるもので

はない、獨逸より若しシレジャ即ち比較的(Comparative)新しき領土を奪ひ收つたならば獨逸の苦痛(Pain)は南獨の一部を失つたよりも大であらう。

又若し獨逸よりシユレスウキツグ、ホルスタイン即ち四十年來の新領土を奪ひ收つたならば獨逸は北海に出づるの道を失ひ、非常なる苦痛を蒙り、ビスマルクの偉業(Great work)は亡びてあらう、況んや今日の獨逸は世界政策(World policy)を收るのてあり「獨逸の未來(Lunure)は海(Sae)にあり」とまで豪語(Vaunt)せられたものである、然るに獨逸が亞弗利加、亞細亞、太平洋上に於て其領土を失ふと云ふ事は獨逸の國命(National life)に關する大問題であつて獨逸人の心中の苦悶如何に大なるものであるかを解す可き筈である、今日英國は獨逸の爲めに寸地だも占領せられて居らぬのであつて而して獨逸の植民地を占領せる事は多大である。

以上述べたる以外にバグダットも英軍(English army)の領する所であり、ベルシヤも同様であり、英人にして若し容易に獨逸人の和を聽かざるに於ては獨逸はその全殖民地を失ふの慮がある、獨逸の今日は眞に危機(Crisis)に在る。

然るにも拘はらず獨逸の勝利(Victory)を云ふに至つては眞に是れ不可解の説ではなす乎。

(二) 今日露西亞は甚だ暴戾(Violent)である、條約(Treaty)を勝手に破毀(Quash)し、勝手に外債(Foreign loan)破毀を宣言(Declare)し、其の同盟國民を賣り其の敵國と握手(Shake hand)して居る、是れ正義上又各國の自衛(Self guard)上許す可らざる行動(Action)ではなす乎、然るに列國は之れを傍觀(By-standing)し正義を口にする米人も痛く之れを攻撃(Attack)せず、日本の論客(Controverser)も餘り入釜しく

之れを論ずる人がない、而して此の横暴の露國は備へあるにも拘はらず獨逸軍の侵入 (Invasion) も受けず其他の國軍よりも亡ぼされもせず、軍隊は解散 (Disolve) し、資金 (Capital) は缺乏 (Vacant) し國內は分裂 (Divide) し、然かも尙ほ國として存在しつある、是れ洵に不可解の現象 (Phenomena) ではない乎、若し一國にして如何なる暴戾を行ふとも之れを緩容す可きものなりと云ふならば獨逸の横暴も同様に容認せらる可き筈ではない乎、若し國際社會が斯く迄も不規律無制裁 (Irregular & unrestrict) のものとなつたならば世界は亂世 (Dark age) である、平和は永久に望まざる可きものではならぬ然るに各國の名士達が連りに永久の平和を叫びつゝ此の亂脈 (Confusion) を觀過するとは何事であるか、洵に是れ不可解である。

或は云ふ、列國は露國に對する適策 (Suitable plan) を見出し得ざる也、是れ其の政

府を承認せず拱手傍觀する所以であると去りとは眞に不可解ではないか、英と言ひ佛と云ひ米と云ひ伊と云ひ日本と云ひ共に最高の文明國 (Civilized country) を以て任じて居るのであり、富強 (Rich & strong) を以て立つて居るのである、其の中に包容する人口も亦頗る多大である。

然るに此等の人民中一人として對露の適當なる政策を樹つるものなしと云ふに至つては餘りに文明國民を無知 (Ignorant) 視したる評論 (Review) ではない乎、是れ不可解である。

露國に付て、不可解なるは尙ほ澤山ある、其の最も不可解なるは、所謂社會主義者 (Socialist) の態度 (Attitude) である、彼等は資本家 (Capitalist) 排斥を口にしつゝ獨逸の資本家を誘ひ來りて之れに利益を與へつゝある、彼等は國內の資本家に禍して、外

國の資本家に福利を與ふるを不當とせぬのである、是れ眞に不可解である、彼等は國家の不名譽 (Dishonour) と不利とを顧みず獨塊などと和を講じつゝある、然かも彼等は同民族たる國內の同胞に對しては戰を宣しつゝある、彼等は然らば眞の平和論者でもないのである、彼等は内外人同視者でもなく平和論者でもなく、國家を危險に陥れ、不名譽ならしめ、分派せしめ、下級者 (Lower class) の專横をのみ援助しつゝある彼等は其の國民に對して爲す所眞に不可解ではない乎。

(四) 米國大統領の演説は正々の氣堂々の風である、演説としては見事なものである、此點學者政治家 (Scholar & statesmen) の立派さが確かに尊重に値ひする、然るに日本に於ては學問を重んずと云ひつゝ學者の説と云ふと政治家や實務家 (Business men) などぞが半尊半卑の風姿あるのは不可解ではない乎、此事は暫く措くとして、米國大統領

の演説中不可解の事は、「獨逸のミタリズムを亡ぼす可し」と云ふ事である、若しミタリズムが悪いならば米國も其の軍兵を増さぬが適當である、歐洲出兵も避けるが至當である、若し又一時の建策として暴を以て暴を撃つの方法を收るならば一九一四年八月に於て、今日の如き準備を爲したならば今頃は大兵を歐洲に送り大艦を大西洋 (Atlantic ocean) に浮べ併て獨塊は容易に屈服するに至つたであらう、又小國の尊重を大いに叫ぶならば何故に自耳義の侵されたる際に於て直ちに獨逸に對して戰を開かなかつたのであるか、此等の點は演説の立派さに對比し來ると、不可解を云はざるを得なくなる、若し絶對に小國を尊重し民族主義 (Populism) を尊重するものならばフヒツヒンの獨立に付ては、レニンがフィンランドの獨立を認めたる如くになすを適當とす可く、中南米のラテン民族に對しては、一切其の自由に放念するを適當とすべ

く布哇も亦米國より切り離すに至當とするに至る筈ではない乎。

(五) 佛國の内閣は屢々更迭する。内閣の動搖あるが爲めに佛國が對外政策に機宜 (Chance) を失した事あるは争ふ可らざる事實である。併作佛國の如き絶對的 (Absolutely) の民主國にありては政府は云ふまでもなく人民の爲めに存在する爲のものとしてあり權力 (Authority) を有すと云ふよりも「公の義務」 (Public duty) を負ふと解して居るものなるを以て人民の代表者にして若し多數を以て政府を攻撃するに於ては内閣の政治家は直ちに其の地位を去るのを政治上の徳義 (Virtue) と考へて居るのである。此事は佛國としては至當の事である。然るに日本に於ては佛國內閣の更迭は惡いと唱へ、此の論鋒を以て、政治家の居据を辯護せんとする風のあるのは蓋し不可解ではない乎。國の歴史政體の差異によつて其の政治的觀念 (Political ideas) も違ふのは當然である。

佛國に對する批評は佛國の風に應じて之れを爲して然る可きものである。併作實際佛國民の自負する愛國心 (Patriotism) に付ては不可解の事がある。内閣大臣の中より獨探 (German spy) を出すなどは沙汰の限りである。佛國としては親獨と新英とは確かに相當理由ある對外政策であるに相違ないけれども今日英國と同盟し、英國兵は佛國に來りて共々獨逸と交戦 (Belligerent) しつゝあるに際して獨逸との親近を策する如きは眞に不可解の事である。日本に於ても獨逸と交戦しつゝ獨逸を賞揚し之れに同情するもの多々あるは甚だ不可解であるが如くに、佛國に於ける此の現象は甚だ不可解である。但し佛國の此の現象は一派の社會主義者中に僅かに存在するに過ぎぬのは、佛國の爲めに寧ろ幸である。

(六) 戦争の目的に關し一時世の問題 (Problem) となつた、戦争の目的は本來國によ

り異なるのが至當であつて之れを全然一致せしめんとするのは不當である、若し之れを一致せしめんと主張するものがあつたならば不可解である。

戦争の目的に關し唯一つ全然一致 (Full Joint) し得るものがある、それは絶対的戰勝 (Absolute victory) と云ふことである、絶対的戰勝と云ふのは獨逸等を亡ぼすと云ふ事の意義ではない一民族を亡ぼすと云ふ事は今日に於てはあり得可らざる事であり列國は共に民族の尊重を稱へて居るのである。

唯だ目的とする所は敵を全然屈服せしめ味方の主張の容れられる程度 (Degree) までの勝利を得る事である、然るに味方の諸國に之れに關し未だ一致したる聲の高くあげられざるは甚だ不可解である、近時 (Recently) 英人の中にも若し勝利を速かに得られぬものならば速かに講和す可しと唱ふる者がある、日本にも斯る説を爲す者がないて

はない、是れ甚だ不可解である。

三、國內の不可解事

國內には政治上社會上幾多の不可解事がある、悉く之を述べるのは暫く措くとするが、其の中に於て一つを述べれば、今我國の富は大いに増加したと云ふ時に於て下級者は益々生計 (Livelihood) に困難すると云ふ事と、之れに對して如何にして之れを救はんかと云ふ事に付て富者 (Richmen) に努力足らざる事即ち其れである。

是れは國家の爲めに大に憂慮 (Anxious) に堪へぬ事である、戰時利得税を課したからとて貧民 (Poor men) が利益である所はなす暴利 (Unreasonable interest) 取締の令を出てたるは結構であるけれども其の影響 (Influence) は主として暴利者即ち富者の取締を爲すと云ふ事に過ぎない、富豪にある折に於てこそ貧民救助 (Rescue of poverty) の

方法を眞面目に行ふ可き時ではないか、然るに未だ此事は行はれたるを見ない、世人も亦之れを説かない是れ不可解ではないか、貧民にのみ同情するのみ決して宜しくない併作貧民は之れを愛護救助すべきものである、富豪資本家のみを尊重するのでは甚だ不當である、併作資本家は亦之れを保護す可く之れを攻撃す可きものではない、労働者(Labourer)と資本家の相争ふは愚である、之れをして争はしめんとする如きは不可解である、相互に相愛し相援けて國家の隆昌(Flourishing)を計る可きものである。

大正八年五月廿日印刷
大正八年五月廿六日發行

定價金九拾五錢

日本雄辯演說學會編纂

發行者 竹生太一
東京市牛込區通寺町二十二番地

印刷者 福山福太郎
東京市牛込區西五軒町五十二番地

印刷所 福山印刷製本所
東京市牛込區西五軒町五十二番地

版權
所有

發行所 牛込區通寺町竹生英堂
賣捌所 神田區錦町誠文堂

377
181

3

終

